

---

# 欲望の街

李仁古

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

欲望の街

### 【Nコード】

N8045C

### 【作者名】

李仁古

### 【あらすじ】

二 十五年の新宿歌舞伎町。香港マフィアが牛耳るこの街で木村裕一は日本人でありながらマフィアの下で働いていた。ある日、飲みに誘われた木村はそこで、日本人の殺し屋の襲われ、一緒にいた岑徳明が殺される。同時刻には倉庫が襲われ、中身を盗られてしまう。マフィアのボス林迎明に犯人探しと婚約者の警護を頼まれる。婚約者の關香梅に警護をしていると、謎の殺し屋に遭遇。そして倉庫を襲った犯人された木村は、關を守りながら真犯人を探すのであった。

## 主な登場人物（前書き）

俺の内を見たら、俺の心も黒い

ザ・ローリング・ストーンズ『黒くぬれ！』

おれたちはジャングルに住んでるんだ。少なくとも歌舞伎町はそう  
だ。

馳星周『不夜城』

## 主な登場人物

木村祐一 きむらゆういち

林組の構成員 ラム 主人公

關香梅 クワン・ヘンムイ

雑誌の編集長 ラム 林の婚約者

林迎明 ラム・ヤンミン

林組のボス ラム

劉偉 ラウ・ワイ

林の右腕 ラム

黃來 ウオン・ライ

林組の構成員 ラム 木村の友人

伊藤建 いとつけん

売春宿、天国のオーナー 情報屋

葉成紅 イエ・チョンホン

北京から来た婆さん

徐虎 ツイ・フー

元SDUの隊員 ラウ 劉の側近

崔成愛 チェ・ソンエ

偽造パスポート制作者

すがわら まさみ  
菅原雅美

逃がし屋 元殺し屋

たなか きょうすけ  
田中京介

GUNSの店長

ゴースト

ラウ  
劉が送り込んだ殺し屋

くどう たかしげ  
工藤惟茂

歌舞伎署刑事課の警部補

サム・ダクミン  
岑徳明

ラム  
林組の倉庫担当者

## 主な登場人物（後書き）

この作品は自身のデビュー作の

「愛のために…」の改訂版です。

ダークなノワール作品を目指して頑張りたいと思っています。皆さん宜しくお願ひしますm( )m

## 全ての始まり

ここは歌舞伎町。別名“眠らない街”。この街は五年前、国会議事堂がテロで爆破されて以来すっかり変わった。今や“闇の街”と呼ばれる様になっている。

国会議事堂の爆破事件の翌年から香港のマフィアが本格的に乗り込んできた。当時街を仕切っていた太田組の組長、太田しのぶが暗殺され、一気に街を支配した香港側の呉組ウーは今度は密入国の手引きさせ、香港の奴らを日本に招待させる事にした。そして今に至る。

俺は煙草を吸いながら新宿ゴールデン街の裏通りを歩いていた。アダルトショップや中国ソープと書いてあるネオン看板が煌々（こうこう）と光る。裏通りは香港の人間、客引き、ホスト、肌を露出させた服を着た娼婦、会社帰りのサラリーマンで溢れている。

楓林閣ふうりんかくと映った赤いネオン看板の前で止まった。自動ドアの前にはサングラスをかけ、黒いスーツを着た物騒な中国人の男二人が立っている。一目で林組ラムの人間だと分かる。

スーツの右の脇が膨れている。恐らくホルスターに収まっているのは黒星ハクシツ。トカレフの中国のコピー品。だろう。

俺は平然と二人の間を抜け、店の中に入った。店の中は白一色の壁が目立った。右にはレジが置かれたカウンターがあり赤いチャイナドレスを着た女が立っており、奥にドアがある。右上には監視カメラが取り付けられていた。正面と左には長い通路があり、通路からは笑い声が聞こえてくる。

俺は煙草をカウンターのの上にあった灰皿に擦りつけた。

「歡迎光臨」

若い女が広東語で言ってきた。

「岑サムは何処かな？」

俺も広東語で言った。

「七 二号室です」

女は左側の通路に手を向けた。

「多謝ありがとう」

女に片目を瞑り、ウィンクする。女が微笑みを返す。通路に歩を進ませる。通路を歩いてみると部屋からチャイナドレスを着た女が食器を運んでいたり、女といちゃつきながら歩いてる男女が横を通り過ぎて行った。

七二。部屋の前に着き、ドアを二回ノックする。ドアが開く。

中から女の笑い声が聞こえてきた。

「木村ムクチュン！ よく来たな！」

女に囲まれ口髭を生やした中年の男、岑徳明サム・タクミンが手を上げて笑いながら言った。因みに俺は日本人だ。

「遅れてすまない」

ソファーにゆっくり腰を下ろす。

「気にするな。それよりお前も飲め」

そう言いながら女どもと話始めた。また、笑い声が聞こえてくる。俺はうるさい笑い声を紛らす為に酒のボトルを取り、グラスに注いだ。一口飲む。悪くはない。

コートのポケットから赤のライターを取り出した。茶色のフィルタ―をくわえ、ポケットに手を入れる。煙草に火がつく。隣に座った女を見た。日本人だ。手にはライターを持っていた。

女は薄い赤の口紅をして、化粧はそんなにしていない。髪はショートヘアで茶髪。目はぱっちりして、少し痩せている。胸の開いた赤いドレスを着て、身長は俺より少し低いくらい。足を組んでいた。とても大人っぽく、魅力ある女だ。

「何かご用でも？」

煙を吐き出す。

「木村祐一きむらゆういちね。一目で分かったわ」

「俺もあんたが誰か分かるぜ」

女が微笑む。

「あんたは歌舞伎署の刑事課の高橋絵里たかはしえり。階級は巡査部長。一九八



六年十一月二十七日生まれ。歳は二十九歳。ついでに住所も言おうか？」

女は真剣な顔で見ていた。

「結構よ」

俺は高橋の髪の中に手を入れる。小型盗聴機が出てきた。無駄な経費を使ったもんだ。

「お疲れさん」

盗聴機に言った。それを床に落とし、踏み潰す。

「何でも知ってるのね」

高橋は青い文字で書かれたケントを取り出し、くわえる。

「他にもいろいろ知ってるぜ」

ジッポで火をつけてやった。

「例えば？」

一端煙草の煙を吸い込み、間を置く。

「あんたの上司の不倫相手やそんなところさ」

高橋が笑った。

「怖い人ね。今度一度食事に行かない？」

「それはデートの約束かな？」

「分かってるくせに」

高橋は頬を膨らませてそっぽを向いた。俺は高橋の首に腕をまわした。

「分かってるって」

耳元で囁いた。高橋は笑顔で振り返った。

外から何かの破裂音が聞こえた。とても乾いた音だ。すぐに9ミリの銃だと分かった。ドアが勢いよく開く。日本人の男が二人立っていた。手には黒星ではなくグロック19を握っている。

「誰だ！」

壁に寄りかかっていた男が上着に手を入れながら広東語で叫んだ。一歩遅かった。片方の男に腹、頭の順に撃たれる。男は体から血を吹き出しながら床に崩れる。壁に血と肉片が飛び散り、鮮やかな色

の血が流れてきた。女達の悲鳴の合唱が始まった。その中からガシヤンとポンプする音が聞こえた。

振り向くとオールバックの男が眉間に皺を寄せながらレミントンのM870のソードオフタイプのショットガンを持っていた。炸裂音。銃口から火花が散る。だが、二人の姿はない。

女達が一斉に裏口に吸い込まれていく。俺はバーカウンターの所に隠れる。後ろから高橋もついてきた。腰に手を伸ばす。ホルスタ―から銃把に刻まれた黒い星、黒星を抜く。

オールバックの男はフォアグリップをスライドさせる。排莢口から赤い12ゲージのショットシェルが勢いよく飛び出された。

嫌な静けさだ。突然ギーという音がした。見ると風で裏口のドアがゆっくり開ける。それがきつかけだった。

オールバックの男の体に9ミリの銃弾が撃ち込まれる。男はソファに倒れ込む。口から血が溢れ、派手なシャツに染み込んでいく。目を開けながら死んでいた。

岑が飛び出す。

「死呀（死ね）！ 日本人ども！」

両手に持った二挺の黒星が火を噴く。片方の男の体に当たり、後ろに飛ばされる様に倒れた。真っ赤な血が宙に撒かれる。

銃弾はあちこちに飛んでいく。ソファ―やガラスのテーブル、酒のボトル、白い壁に当たり、弾ける。銃の遊底が動きを止める。弾切れだ。岑は弾倉を抜き出し、新しい弾倉を入れようとしていた。

男は岑にグロツク19を向ける。銃声。岑の体に9ミリの弾丸が撃ち込まれた。弾丸は体を貫き、後ろの壁に当たる。岑は壁を背に倒れた。もうピクリとも動かない。

透かさず男を撃った。男の胸に三発当て、吹き飛んだ。綺麗な血を宙に撒きながら。

部屋の中は硝煙が立ち込めていた。床には死体や金色の薬莢、ガラスの破片、コンクリートの破片などが散らばっている。

サイレンの音が聞こえてきた。誰かが通報したのだろう。

「俺はもう行くぜ」

黒星をホルスターに入れながら高橋に言った。高橋が頷く。

「今度会いに行くわ」

微笑んだ。軽くキスをする。高橋は顔を赤くしていた。

裏口に出た。暗く、電灯が一つ不気味に光っており、蛾がが集っている。俺はすぐ右にある工事用のフェンスをずらす。ひと一人がやつとぐらいの細い道が現れた。道に入り、フェンスを元の位置に戻し、暗い道を走り抜ける。

暗い路地から出ると、酔ったサラリーマンやらポン引きが楓林閣の前に集まる。俺は野次馬を装う。

三台のパトカーが到着。ドアが開き、中から刑事課の刑事と制服警官が出てくる。

「お前らは裏口からだ！」

短い黒髪、鋭い目、整った顔立ち、黒いスーツを身につけた刑事課の一人、工藤惟茂くどうただしげ警部補が叫ぶ。目が合った。案の定寄って来やがった。

「木村。お前が犯人か？」

「ご名答。」

「そんな訳ないじゃないですか、工藤警部補」

平然を装いながら必死に言う。こいつには余り目を付けられたいはない。

「……そうか。最近じゃここも物騒だ」

俺は笑ってしまった。

「この街で物騒じゃない所なんてありますか？」

「それもそうだな」

工藤はそう言い残し、左手にグロック19を握りながら店の中に入っていく。俺は店に入るまで見てから自分のねぐら帰る事にした。まったくとんでもないパーティーに招待されたもんだ。

## 裏切り者と婚約者

太陽の日差しが靖国通りが見える窓から射し込む。静まり返ったレストランで俺は朝刊を読みながら、コーヒーを飲んでた。テーブルにはベーコンとスクランブルエッグとサラダが乗っていた皿とライスがまだ少し乗った皿が置いてある。

新聞には“林組に宣戦布告？”とデカデカと書いてあった。どうやら昨日襲ってきた奴らは大林組おおおやしきの組員らしい。

大林組とは、太田しのぶが死んで、その跡目を幹部だった大林和久すひさが継いで、影で何か色々やってるらしい。

コートのポケットの中に入った携帯電話が小刻みに振るえだす。すぐに止まる。これは林組ラムの召集の合図だ。

コーヒー飲み干し、青色の椅子から立ち上がり自動ドアを抜け、靖国通りに出た。

道には多くの人で溢れていた。サラリーマンが鞆を持って西武新宿駅に向かっている。スカートを短くし、セーラー服を着た女子高生。学生服のボタンを全部あけて、耳にピアスをつけ粋がった奴らがぞろぞろと歩いている。粋がれるのも今の内だ。この街で生き残るのは難しい。その内足下を失い、どん底の人生が待っている。

ドン・キホーテの横のセントラルロードに入った。店の立て看板を出したり、ドアの鍵を外したり、店の窓を拭いたりしている店員が目に入る。

花道通りに向けて歩きながら、ラークを取り出し、火をつけた。煙草を吸いながら歩いていると新宿コマ劇場が見えてきた。コマ劇場と新宿ロフトの間を抜けて、花道通りに出る。

花道通りを横断し、クイーンズタウンホテルの前を通り過ぎた辺りで大きなビルが見えてきた。

林株式会社。ここは表向きの仕事としてやっている。林ラムはこのビルに地下を作り、そこでいろいろ話の場などとして活用している。

煙草を投げ捨て、中に入った。中は普通の会社と変わらない。正面に美人な日本人がいる受付があり、右にエレベーターが二機あり、左には階段がある。

俺はエレベーターに乗り、1の番号を二回押す。これは地下に行く方法なのだ。エレベーターが動きだす。すぐに止まる。

トビラが開くと、白い壁の通路が出てきた。通路を歩くと、丁字路の通路になっている。正面にはドアがあり、左右にもドアがある。そして、正面のドアの上にはカメラが取り付けられている。これで誰が来たか確認しドアを開ける仕組みになっている。

カシャという音が聞こえた。ドアが開いたのだ。中に入ると、ドアの前には男が立っていた。

男はとても整った顔をしていて、髪をワックスで固めている。黒いスーツを着て、赤いネクタイを締めていた。

「みんなもう揃ってるぜ」

高くも低くもない声。黄來ウオン・ライ。香港の九龍クイロンで生まれ、十九の時に林ラムと知り会いこの道に入ってきたらしい。よくある話だ。

「情報は？」

歩きながら話した。

「まだ無い。奪われたのは薬ヤクと銃だ」

「戦争でもする気なのか？」

黄ウオンが肩を竦める。

「さあな」

黄ウオンがドアを開けると、話し声が聞こえてきた。

中の部屋はシンプルだった。正面に木製の長テーブルがあり、椅子が八つあり、左にはドアがあり、林ラムの書斎がある。

「やあ、木村君」

正面にいた優しそうな白い口髭をしたおじさん、林組ラムのナンバー二の王超ウオン・チャオム。林ラムとは呉ウーの時から知り合いで、よくしてもらってるらしい。

「王先生」

「よお、木村」  
ムクチユン

その三つ椅子を開いて頬に傷があり、太い葉巻を吹かした男が言った。ナンバー三の陳堅。<sup>チャン・キンラム</sup>林との関係は命の恩人という感じだろう。跡目を継いだ林は反対派の奴らに襲撃に合う。その時に陳は林を庇<sup>チャンラム</sup>って青龍刀で斬られた。それが頬の傷だ。その日から林とは固い絆<sup>ラム</sup>で結ばれている。

「陳先生」  
チャンさん

そう言っただけ空いてる椅子に座った。ドアが開いた。顎に髭を生やし、グレーのスーツを着た男が現れた。

この男こそ林組のボスである林迎明だ。<sup>ラム・ヤンミン</sup>両親を交通事故で亡くし、親戚にたらい回しされた挙げ句捨てられたのだ。そこをたまたま呉<sup>ウー</sup>が見つけ、育てた。香港では無くもない話だ。

「集まったか？」

みんなは黙っていた。

「集まった訳は言うまでもない」

「犯人の検討は？」

王が呟く様に言った。<sup>ウォン</sup>林は首を横に振る。

「腐れ日本人の仕業かもしれん」

今の言い方に特に怒りは感じなかった。逆にその通りとも思う。

「どんな事をしてもいい。見つけてここに連れて来い」

そう言っくとみんな立ち上がり、ドアに向かって歩いた。

「祐一」  
ヤウヤ

振り向くと林が指で合図してきた。<sup>ラム</sup>林に近い椅子に座る。

「何です？」

林は暗い表情だった。<sup>ラム</sup>

「余り言いたくはないが、どうやら身内の奴が私の座を狙った犯行らしいんだ」

「まさか」

そうは言っただが、余り驚きはしなかった。

「私もそう思うのだが、この時期なんでな。念の為に身内も調べて

くれないか？」

「……分かりました」

少し間をおいて返事をした。日本人でも身内を調べるのは気が進まない。

「それと、これはお願いなんだが……香港に行ってる間にある女を見てほしいんだ」

「女……ですか？」

「実は……今年のクリスマスに結婚すんだ」

林は照れくさそうにポケットから写真を取り出した。

「この女と」

写真を渡された。写真には林と女が香港の維多利亞湾を背景に撮られていた。

「關香梅だ」

写真を返した。

「この女を見ててくれ」

「俺で良ければ」

林はほっと息を漏らす。

「お前で良かったよ。じゃ明日から頼むぞ。ここに朝の九時に行ってくれ」

住所が書かれた小さな紙を渡された。

「分かりました」

紙を受け取って、椅子から立ち上がった。

「頼んだぞ」

「係」

ドアを開けると、黄が待っていた。

「何て言われたんだ？」

「別に」

エレベーターに乗った。黄が地下一階のボタンを押した。

「送ってくよ」

「悪いな」

トビラが開く。灰色の薄暗い駐車場。黄<sup>ワウオン</sup>が手前の黒い日産のスカイラインと書かれた車のドアを開けた。

「家でいいのか？」

「ああ」

車に乗り込んだ。

靖国通りの歌舞伎町一番街の前で車が止まった。

「情報が入ったら連絡してくれ」

「好<sup>わかつた</sup>」

車を降り、歌舞伎町一番街のアーチを潜った。

一番街を歩いていると“食”と書かれた焼鳥屋の前に来た。ここが俺の埒<sup>ひんぐ</sup>だ。

二階建ての作りで、一階は焼鳥屋で二階が俺の家だ。家を探している時、この店長と知り合い、店に落書きをする奴がいるとの事、ようはそいつを追い払えつてくれるなら住ませてやると言われた。

店の横に階段があり、そこから二階に行ける。俺はその階段を上がり、ドアの鍵を開け、中に入った。

正面のリビングのテーブルの上には空になった酒のボトルや灰皿から溢れ返った煙草の吸い殻の山、カップラーメンなどが散乱していた。右にドアがある。ここが寝室になっている。

今すぐには動きたくなかったので取り合えず、片づける事にした。空のボトルをゴミ袋に入れ、煙草をコンビニの袋に入れた。

ある程度綺麗になったので、コートを椅子にかけ、寝室に向かった。

寝室はベッド一つだけ。ベッドに腰をおろし、腰に付けたホルスターを取った。ベッドのマットをめくる。中に茶色のホルスターが銃を収めた状態で出てきた。

ホルスターを取り、替わりにもう一つのホルスターをマットの下に置く。マットを元に戻し、ホルスターから銃を取り出す。パラ・オーディナンスP14だ。

弾は四十五口径を使っており、コルト・ガバメントと形が似てい



るが、全くのオリジナルの銃だ。

安全装置が掛かっているか確認し、ホルスターに戻し、部屋を出る。コートに腕を通す。家のドアを開け、太陽の光が降り注ぐ歌舞伎町に出ていく。

## 情報

職安通りを東新宿駅に向かって歩いていった。時刻は正午になろうとしていた。空腹感はない。

職安通りは相変わらずの人の量に、交通量。携帯電話で上司と話しているサラリーマン、デジタルカメラを下げた香港の連中、横を通る奴にしぶとく交渉する客引き、二十代の男をカモろうとするポン引き、穴が開き、色が褪<sup>あ</sup>せたジーンズを掃いた薬中<sup>ヤクチュウ</sup>、いつも通り。松宝ビルの前で曲がり、影でひっそりとした車の修理場が見えてきた。前まで来ると、油の臭いが漂ってくる。

中に入り、青いインプレッサの下に潜り込んだ男

えもとはるひな  
江本晴久

に近寄る。

「悪いな。他の日にまた来てくれ」

力の籠<sup>こ</sup>もった声が聞こえてくる。溜め息をつき、しゃがむ。

「俺だよ」

それを聞いて頭だけを車体の底から出す。顔を見てまた戻る。

「昨日、陳<sup>チャン</sup>に変わった様子はなかったか？」

溜め息が聞こえてきた。底から体を出し、立ち上がる。

「知ってるぞ。あんた昨日、楓林閣にいたんだろ？」

「まったくその通りだ」

後ろにあった、タイヤの上に座る。

「俺に被害は？」

「ない」

嘘。百パーセント安全なんてこの街には存在しない。江本が溜め息をつき、また潜り込む。

「変わった様子はなかったか？」

「いや。特に気になる事は無かったぜ」

車体の底で、車の整備しながら言った。それをタイヤの上に座りながら聞く。

「ほんとか？」

顔に真っ黒な油を付けながら出てくる。

「ああ」

タオルで顔を拭く。溜め息をつきながらラークを取り出す。

「おい」

見上げる。江本が眉間に皺を寄せながら立っていた。

「ここは禁煙だ」

江本は壁に指をさす。その先には禁煙のマークが貼ってあった。タイヤから立ち上がり、外に出た。

「邪魔したな」

茶色いフィルターをくわえながら言った。江本が蠅はえを追い払う様に手を動かす。

火を付けた。煙を吐く。二丁目の中を通り、区役所通りに出た。

区役所通りを歩き、ゴールデン街の裏通りに入った。まだ昼だが人の量はまずまずだ。青いネオンで天国と映った二階建ての売春宿に入る。

「お早う御座います。木村さん」

入り口にいた男が笑顔で言った。俺は微笑みながら手を振る。通路を歩いていると目の前から肌を露出した服を着た女達が猫の様な声で来た。

「お早う御座います！ 木村さん！」

何人かの女が腕を組んできた。

「今度あたしの所に来てよ木村さん！」

「ちよつとずるいわよ！」

「そつよそつよ！ あたしの所に来てよ木村さん！」  
忽たちまち女同士で口論になった。人気者は辛いな。

「分かった分かった。順番に君たちの所に行くよ。先ず最初に君だ」  
適当に正面にいた女に指をさした。

「もうそれぐらいにしてやれよ」

後ろから男が微笑みながら来た。俺は助かったという表情を伊藤

に向ける。

伊藤建。ここ、天国のオーナーだ。こいつとは街のガイドをやっている時に知り合い、それから俺の数少ない友人の一人だ。

「は〜い」

女達が通路を歩いていった。

「まあ、入れよ」

伊藤がドアを開け、招く。俺は部屋の中に入った。

太陽の日が入らないここは少し暗い。部屋の中は白い壁で木製の大きなデスクが窓際にあった。俺は目の前の椅子に座る。

「で、今日は遊びに来たのか？ いろいろいるぞ。アメリカ人？

フランス人？ ロシア人？ タイ人？ 中国人？ 日本人？」

伊藤はニヤニヤしながら言った。

「そんなんじゃない」

伊藤がデスクの上に置かれた酒のボトルを持った。

「冗談だよ」

グラスに酒を入れた。

「最近、劉の様子がおかしい」

「劉？ 劉偉の事か？」

伊藤が一口飲んだ。

「ああ。頻繁に大林組の幹部の吉田敦史と会ってるみたいだぜ」

吉田敦史。大林組の幹部で次期組長と言われている。なんでも昔、かちこみに来た鉄砲玉 殺し屋の事 三人を返り討ちにしたとか。

「いや、大林組とは最近もめてな。それで劉が行ってるんだ」

伊藤はへえーと言う様な顔を見た。

「だが、念のために調べてくれ」

伊藤はショートホープを一本取り出す。

「お前は？」

「俺は明日から林さんの女のお守りなんだよ」

「女がいたなんて初耳だな。どんな女なんだ？ 可愛いのか？」

伊藤が顔を近づけてきた。女の話になるといつもこうだ。

「情報頼むぜ」

伊藤が何か言う前に立ち上がった。

「へいへい」

ふてくされていた。ドアノブを回す。

「気をつけるよ。昨日からこの街の雰囲気が変わった」

「いつもの事だろ」

俺は微笑みながら部屋を出た。そう、いつもの事だ。

天国を出ると、歌舞伎町に夜が訪れようとしていた。太陽が真っ

赤な光を放ちながら沈んでいく。

疲労が出てきたが、休む訳にはいかない。携帯電話を取り出し、

番号を押す。コール一回……二回……電子音が止まる。

「何だ？」

寝起きなのだろう。苛立った様子だ。

「会って話したい」

「……………」

煙草に火をつけた。

『三十分後だ』

「分かった」

電話を切り、ポケットに入れる。煙草をくわえながら区役所通り

を再び風林会館に向かって歩き出す。

風林会館を左に曲がり花道通りを歩き

交番の前を通り、新宿ハイジア駐車場に着く。

静かな駐車場に靴の底が地面に当たる音が響き渡る。短くなった

煙草を指で弾き、灰色のコンクリートに当たり火花が散った。

「五分遅れだ」

後ろにある真っ白のシビックから黒のパーカーに灰色のスエット

を来た男が出てきた。

「なあ、正一郎……………」

萩原正一郎はシビックのボンネットに腰を下ろす。

「ああ。言いたい事は分かってるよ」

なら良いんだがな。

「王に不信な動きはなかったか？」

萩原はゆっくり首を横に振る。

「静かなもんさ。韓国、上海、北京の妙な動きもないしな」

溜め息をついた。一日中ずっと歩き回って結局、劉が怪しいだけか。ラークの箱を出すのが中身は残り一本。最後の一本に火をつけ、煙を肺に入れる。

「起こして悪かったな」

萩原は腰を浮かし、車の中に入った。エンジンが音を立てて生き返る。シビックが出口に向かって進み出す。俺はそれを煙草を吸いながら見送る。

駐車場に静寂が戻った。俺は駐車場を出て、花道通りに入る。夜の歌舞伎町。眩しい程に光るネオン看板。派手に露出した服を着た娼婦がちらほらと見え始めた。

歩道で軽く手を上げる。目の前にタクシーが止まった。煙草を投げ、中に入る。一番街、と告げてタクシーは動き出す。

タクシーを降り、一番街のアーチを潜る。人で溢れていた。かき分けながらなんとか塀の家に着く事が出来た。

ドアを開け、寝室に直行。コートを脱ぎ、そのままベッドに倒れ込む。すぐに眠る事が出来た。さすがに朝からずっと歩いていると疲れるものだ。

真つ暗な世界。手には黒い回転式拳銃のホルトパイソン。いつの間にか雨が降りしきる路地にいた。目の前には女がゴミ袋の山に倒れている。後頭部に大きな穴が開き、脳味噌が雪崩の様に流れている。真つ赤な血に濡れ。

動く。まるでゾンビ映画を見ている様だ。ゆっくり起きあがる。

「……さん」

なんだよ。良い所なのに。

「木村さん。起きて下さい」

目を開けた。若い男が俺の体を揺すっていた。頭が回ってきた。ああ。下でバイトしている赤崎竜也あかさきりゅうやだったかな。

「何だよ？」

目を擦りながら言った。腕時計を見た。八時二十九分。

「何か物騒な連中が下に来てますよ」

少し怯えた表情でそう言った。その言葉で少し目が覚めた。起き上がり、窓から下を覗く。黒く派手なスーツ。髪をつんつんにした男達。大林組の連中だ。“面倒な事にならなければいいが” と思いつながらコートに腕を通す。

「大丈夫だ。なんとかする」

赤崎にそう言ってドアを開け、階段を下りた。男達が一斉に中村を見る。

「何の用だ？」

「若頭わかかしらが呼んでます」

若頭。吉川の事だ。

「呼ばれる覚えはないな」

そう言うのと脇腹に何か当てられた。銃だ。黒いコンパクトなオートマチックのS&WM5906だ。コンパクトの割に十四発も入る銃なのだ。

「一緒に来て貰いますよ」

「こんな水鉄砲で脅そうつてののか？」

笑いながら言った。左にいた男が近づいてき来る。透かさず腹にパンチを食らう。

「連れてこい」

両端に男達に腕をがっちりと組まれながら歩いた。

靖国通りに黒いベンツが止まっていた。その車に入った。両端に二人が乗り、前に一人乗り、車が動き出す。車は靖国通りを区役所通りに向けて走り、区役所通りに入り、風林会館を横切り、ビルが立ち並ぶ歌舞伎町二丁目に来た。車が止まった。右にいた男が降りる。

「降りろ」

俺は黙って車を降り、雑居ビルの中に入った。正面のエレベーターに乗る。窮屈<sup>きゆうくつ</sup>だ。エレベーターを降り、事務所の中に入った。入ると、正面に男が堂々とデスクの上に足を置き、葉巻を吹かしていた。何時見ても気に食わないな。

この男が大林組の幹部、吉田敦史だ。

「連れてきました」

「おう」

デスクの前まで行った。

「何の用だ？ 用が無いなら帰るぜ」

吉田が睨んできた。まさにヤクザだ。

「まあ、座れ」

目の前の椅子に座った。

「ブツは何処だ？」

葉巻をガラスの灰皿に擦りつけた。

「何の事だ？」

「とぼけるな。倉庫のブツの事だ」

まったく言ってる意味が分からない。

「そりゃこつちのセリフだ。」

吉田はデスクの引き出しから何か取り出した。写真だ。

「こいつらを知ってるだろ？」

写真には楓林閣で襲ってきた男二人が写っていた。

「何を隠そう。こいつらは昨日の十一時頃、楓林閣に来ていた岑<sup>サム</sup>を拉致るために行った。だが戻ってこなかった。全員死んでたんだよ。一人を除いてな」

手に汗が滲んできた。

「何故お前は生きてる？ そもそも何で、倉庫を担当している岑<sup>サム</sup>がお前と一緒に飲んでるんだ？」

「誰からその事を？」

吉田は写真を引き出しにしまった。



「それは問題じゃない、だろ？」  
拳を強く握った。

「話を戻そう。ブツは何処だ？」

「知らん」

「早く見つかった方がお互いの為じゃないか？」

俺は立ち上がり、後ろのドアに向かった。吉田が笑顔で手を振っている。

「また会おうぜ」

ドアを勢いよく閉めた。さっさとビルから出て、近くにあった煙草の自動販売機でラークを買う。すぐに箱から一本出し、火をつける。不味い。

俺は花道通りを考えながら歩いていった。

まず、そもそも岑<sup>サム</sup>が俺を誘った理由。奴とはそれほど仲が良い訳でもないのに。次に何故俺があそこにいた事を知ってるのか。あの時は野次馬以外に人は見ていない。次に吉田の言葉だ。奴は拉致するために行かせたと言うが、明らかに殺す気で行かせた筈だ。何故なら男が入ってきた時の目だ。冷酷な目だった。拉致する奴の目じゃない。

短くなった煙草を捨て、新しいのに火をつけた。た。胸の中にある靄<sup>もや</sup>は消えなかった。

「大丈夫？」

振り向いた。高橋絵里だった。

「何ともない」

「ねえ、この後用ある？」

煙草の煙を深く吸い込んだ。

「別に」

「じゃ、決まりね」

高橋が笑顔で腕を絡ませた。どうやら今日は高橋と夜を過ごす様だな。

## 謎の刺客

俺は煙草を捨て、銀色の外車。キャデラックのCTSに乗り込んだ。

「傷付けるなよ」

江原が言った。

「分かってるよ」

エンジンを掛け、ギアをDの位置に動かす。アクセルを踏み、車を動かした。朝の通勤で賑わう職安通り。

昨日の夜の事を思い出す。昨日はホテルに行き、激しいセックスを繰り広げた。その後、シャワーを浴び、眠った。朝になると、ベッドで寝ている高橋をそのままにしてホテルを出た。

車は東新宿駅方面に進み、駅の二つ前で曲がり、住宅街に入った。住宅街に入ると林から貰った紙に書かれた住所を頼りに家を探した。いろんな形の家が立ち並び、学生などに気をつけながらゆっくり走らす。

サイドブレーキを引いて車を止める。目当ての家に着いた。とても豪華な家だ。一人で住んでるとは思えない。

車を降り、玄関の前まで来た。チャイムを鳴らそうと指を伸ばしす。だが、押さなかった。その前に身だしなみを確認だ。黒の上下のスーツ、白いワイシャツ、紺色のネクタイ。チャイムを鳴らしす。殆ど待つ事はなかった。

「請」

綺麗な広東語だ。ドアノブを回し、中に入った。

玄関は綺麗に整理されていた。足下には、これから履くと思われる黒のヒールの靴が一足だけだった。右は木製の靴入れがある。その上には金魚が入った水槽が置いてある。正面にはリビングに繋がっているとされる通路があった。壁は白かった。

奥から足音が聞こえてくる。女が現れた。化粧は濃くも薄くもな

く、くつきりとした二重、黒く長い髪、足が細く、黒のパンツスーツを着ていて、肩からはシヨルダーバックを下げている。一目で住んでる世界が違つと分かつた。

「對唔住」

女は広東語で謝つてきた。急いで靴を履く。

「いえ、気にしないで下さい」

俺も広東語で返す。ドアを開け、外に出る。

「あの……あなたが木村祐一さんですか？」

「係」

「あ、私關香梅です。關と呼んで下さい」

林の女であり、婚約者の關香梅。写真で見た時より綺麗に見えた。

俺は後部座席のドアを開けた。

「では、關さん」

關が乗り込むとドアを閉め、運転席のドアを開け、乗り込んだ。

車は職安通りに再び戻り、車の列に入る。

「あの……林さんから聞きました。殺し屋……なんですよ？」

「唔同（違います）」

きっぱり言った。

「でも何人も殺したと」

「もし殺し屋ならこんな事はしませんよ」

「あなたは優秀だからだと言つてました」

「……」

もう何も言わなかつた。余計な事を言つてくれたぜ。溜め息をつき、頭を搔く。

信号が赤になった。車を止める。バックミラーを通して關を見た。緊張しているのか落ち着きなく辺りを見渡す。

俺は關から信号機に目を動かす。やたらに長いな。真つ白で綺麗な手が伸びてくる。その手の行き先は股間。

細い腕を掴む。後ろを振り返る。

「何考えてる……」

關は顔を真っ赤にし、今にも泣きそうになっていた。

「お……男の人って……あの……その」

溜め息をつく。腕を離し、体を戻す。やっと信号が青に変わった。アクセルを踏み、進む。

「林さんがそれをやると誰でも喜ぶと言われて……その」

声が震えている。内心やっぱりかと思っていた。

「二度としないで下さいね」

嬉しいと感じた自分を打ち消す様に冷たく言ってしまった。静かになった車は税務署通りを走り、神田川に架かる淀橋を渡った。

「そこ右に曲がって下さい」

曲がるとオフィスビルがずらりと並んでいた。

「そこです」

關が指をさす。指先には十五階建てのビルが立っていた。地下駐車場に入り、エレベーターに近い所に止める。ドアを開けると、關も出てきた。關がエレベーターの方に歩いていく。後を追う。同時にセンサーで鍵をかける。

エレベーターに入り、8のボタンを押す。動き出した。エレベーターは一階一階スムーズに上がっていく。八階に着いた。エレベーターを降りる。降りると右の通路を歩く。歩いていると前から男が近づいてきた。

「お早う御座います」

そう言っって横を通り過ぎていった。

目の前にドアが見えた。それを開け、中に入る。中は強化ガラスで仕切られたデスクがずらり並んでいた。

關は一番奥のデスクに座った。デスクの上はパソコンに企画書の様なものに白いマグカップなどが乗っている。

「お迎えは何時に」

關は腕時計を見た。

「八時に」

若干、緊張が残っているが、良くなっている。

「分かりました。何か有りましたらここに電話を」  
電話番号が書かれた紙を渡した。

「分かりました」

俺はドアに向かう。關クワンの方を振り返った。女と話している声が聞こえる。

「編集長。新しい彼ですか？」

女はニヤニヤした顔で關クワンに聞いていた。

「そんなんじゃないの」

びつくりするほど日本語が上手かった。

「またまた！」

關と目が合う。俺は気づかない振りをしてドアを開けた。エレベーターで駐車場に下りる。

駐車場に着くと携帯電話が震えた。画面には伊藤の電話番号が表示されている。

「何だ？」

車のドアを開けた。

『周りに人は？』

「ちよつと待て」

周りを確認する。誰もいなかった。念のために車の中に入る。

「大丈夫だ」

『情報を入手したぜ。こいつは思ったより厄介だ』

『それで情報は？』

『会って話す。三十分後にいつもの所で会おう』

「分かった」

電話を切り、エンジンをかけた。

靖国通りの二階建ての喫茶店、アイリスに着いたのは二十分後だ。二階の隅の席に座り、そこでコーヒーを飲んでた。腕時計に目を落とす。午前九時五十七分。

階段から伊藤が現れた。伊藤は俺に気づくと向かえの席に座った。「珍しいな。お前がこの場所に呼ぶなんて」

「悪いな」

コーヒールを一口飲んだ。

「情報は？」

「ああ。実は……」

銃声。窓ガラスに穴が開き、伊藤の頭が弾けた。血と脳味噌が飛び散る。

すぐに床に伏せた。目の前に目を開け、俺を直視しながら死んでいる伊藤が倒れている。涙がこみ上げてきた。それをぐつと堪え、「すまない」と心で呟きながらゆっくり移動する。

また銃声。頭上を掠めて壁に当たる。一気に非常ドアに向かい、ドアをぶち破った。

非常階段を下り、路地に出た。路地を走り抜け、車を止めた区役所通りを目指す。

新聞紙をマットにし、寝ているホームレスを飛び越え。残飯を漁あさっている鴉カラスが俺に気づき、空に舞い上がる。

やっと区役所通りに出る。キャデラックに乗り込み、キーを差し込んだ。頭に何か突きつけられた。ガチリと鈍い音が車内に響く。

銃だと気が付くのに時間はかからなかった。

「ハンマーは起きてますよ」

広東語だ。バックミラーを見た。後部座席に男が一人いる。冷酷な目、無表情、ブラウンのキルトジャケット、白いシャツ、紺色のジーンズ、手にはH&K USPヘッケラントドコックを持っている。俺を殺して外に出ても、誰も怪しまないだろう。少なくとも素人には見えない。

「らしいな」

ハンドルを握る。手には汗が浮き出ている。小さな紙を渡された。「ここに行け」

「その前に聞きたい事がある。何故を俺を狙う」

「……それはお前がブツを盗んだからだ」

またかよ。取り合えずこの場を抜け出さなければ。

エンジンをかけ、思いつきりアクセルを踏み込んだ。タイヤが勢

いよく回転して、アスファルトを擦った。

区役所通りを時速百キロで走った。

「おい！ スピードを落とせ！」

男は銃を突きつけてくる。俺は笑い飛ばす。

「どうせ死ぬんだ。死なせてくれ」

ゆっくりシートベルトをする。対向車線に出たり、車をどんどん追い越す。まるで映画だ。

「殺すぞ！ スピードを落とせ！」

「分かったよ」

ハンドルをきった。ガードレールを突き破る。人が逃げっていく。電信柱に突っ込んだ。目の前が真っ暗になる。

どのくらい気絶していたのだろう。短時間だったかもしれない。次第に光が見えてきた。

目の前に人が車を囲んで中を覗いている。横を見た。男がフロントガラスを突き破っていた。頭にはガラスの破片が皮膚に刺さっていて、所々皮が剥けて肉が見えている。ダッシュボードには血が小さな池を作っていた。

ドアを蹴り開け、外に出る。頭が酷く痛む。人々が心配そうに見てきた。

「大丈夫？ 今、救急車呼ぶから」

中年の女が携帯電話を出した。

「そいつは死んでる」

そう言って人をかき分けてゴールデン街に向かった。中年の女はただ呆然としていた。

天国に入ると、みんな真っ青になっていた。俺はなにも言わず伊藤の部屋に入る。

伊藤はいつも陽気だが、利口な奴だ。自分にもしもの事があった時の為に何か残している筈だ。

俺はデスクの引き出し、ベッドのマットの中、クローゼットの中、床の中、あらゆる所を探したが何も出てこなかった。

椅子に座った。頭がまだ痛む。苛立ち、目の前のデスクの上に置かれた本や酒のボトルを吹き飛ばす。

ラークを取り出す。茶色いフィルターをくわえ、火をつける時だった。ふと下に撒き散らした中に妙に引っかかる物が落ちてた。キーホルダーだ。

キーホルダーを拾う。思い出した。伊藤に初めて情報を頼んだ時に伊藤は自分にもしもの事があつたらこれを使えと言っていた。

キーホルダーの真っ黒の固体の真ん中を押す。すると、後ろの壁が動き出した。壁からテープの山と金庫が出てくる。

俺はテープの山を見た。山と言っても綺麗に並べてはあるが。

昨日の日付が書かれたテープを見つけ、取った。それをコンポに入れ、再生ボタンを押す。

「……これを聞いてる頃は俺は死んでるんだろっな。笑っちゃまうな。それはともかく、黒幕は劉偉ラウ・ワイだ。目的は分からんが、倉庫のブツをねこばしたのは奴だ。吉田もグルだ。あいつの事だ。多分、頭を取りたいんだろっな。ここからよく聞いてくれ。どうゆう訳か奴ら林ラムの女を狙ってる様だ。後の事は本人に聞いた方がいいだろう。なお、このテープは自動的に消滅する。……じゃあな」

テープが破裂。まるでスパイ映画だ。俺は椅子から立ち上がり、ドアを開ける。女達が呆然と立ち尽くしていた。

店を出て、ゴールデン街の出口に向かって走り出す。区役所通りに出ると目の前に止まっているタクシーに目をつけた。腰からパラ・オーディナンスを抜き出し、運転席のガラスを突つつく。運転手は真っ青な顔になり、すぐに両手を上げた。

「降りろ」

低い声で言った。運転手は率直に従う。タクシーに乗り込んだ。アクセルを踏んで職安通りに目指してスピードを上げた。

俺はアクセルを目一杯踏み込んだ。メーターの赤い棒が百キロと白い文字で書かれた上を過ぎる。目指すは關クワンのいるオフィス。

ビルの前でブレーキを踏み込んだ。間一髪他の車にはぶつからな



かった。ドアを勢いよく開け、ビルの中に入った。

ビルの中に入り、エレベーターに乗り込んだ。8のボタンを押し、エレベーターが動き出す。とても遅く感じた。

八階に着くと、ドアが完全に開く前に隙間から出た。通路を走り、オフィスのドアを乱暴に開ける。周りの人が一斉にこっちを見た。気にしてる場合ではない。息を切らしながら關クワンのデスクに向かう。關クワンが心配そうに見ていた。

「どうしたの？」

「時間が無い。ここから出なければ」

關クワンの腕を掴んで無理矢理椅子から立たせた。

「ちよつと。何処に行くのよ」

怒っている様だ。気にせず、非常階段に向かう。周りに目を配りながら。従業員が不安そうな顔で見ている。突然、前に警備員が現れた。

「ちよつとあんた。何してるですか」

話を無視して横を無理矢理通った。警備員が肩を掴んだ。

「警察呼ぶぞ！」

段々苛立ってきたので腕を払い、透かさず右足で警備員の胸の部分を蹴った。後ろに吹き飛んだ。警備員は床でうずくまっていたまま動かない。

非常階段のドアが見えた。俺が入ってきたドアが開く。入り口から四人組の男が入ってきた。寒気が俺を襲う。内二人は黒いバツクを持っていて。先頭の男は独特の奴だった。赤い丸サングラスにカウボーイハットで、頬に傷があり、真つ黒なスーツを着ていた。

目が合う。とっさに關クワンを吹き飛ばした。視界に關クワンは床に倒れるのが分かる。バツクからアサルトライフルのコルトM733を出す。血の気が引いた。床に伏せる。けたたましい銃声が鳴り出した。

銃弾は正確に飛んできた。急いで、デスクの影に隠れた。

パラ・オーディナンスを取り出す。安全装置を外し、がむしゃらに撃ち返す。当たらなくても、時間稼ぎがしたかった。あつと言う

間に遊底が止まり、隠れていた銃身がはっきり見える。銃口からは白い煙が昇る。

關クワンのいる所まで体制を引くくして 最早、床を這いずっていた。寄る。關クワンは目をぐっと閉じて耳を押さえていた。

震える手で弾倉を抜き、弾丸が詰まった新しい弾倉に変える。遊底止めを親指で押す。音を立てて元の形に戻った。

「唔好行開呀（離れるなよ）」

關クワンは言い終わる前に何回も頷きながら、腕を力強く掴む。いつの間にか銃声が止み、声を殺して泣く声が聞こえてくる。

デスクの下から周り見る。従業員の足が邪魔だったが四人の位置は大体分かった。

「合図したら、あそこに走れ」

小さい声で、非常階段のドアに指をさし言った。關クワンは頷く。目には涙が溜まっている。

俺はもう一度覗き込む。四人はじわりじわりとこつちに向かっている。一番右の男の爪先に標準を合わせ、振り返りながら合図を送った。

關クワンが走り出す。走ったと同時に引き金を引く。靴の爪先が破裂した。足の指と靴の革が飛ぶ。どちらも血の色に染まっている。

痛みの余りに叫びながら男は倒れた。透かさず、左のデスクに転がりながら移る。

右のデスクが銃弾が撃ち込まれる。銃弾はいとも簡単にデスクを穴だらけにした。要するに蜂の巣だ。

デスクを影にして、寝そべって、体を左に傾ける。両手で構え、男に銃弾を撃ち込んだ。肉片と血が飛び散る。赤い丸サングラスの男にも撃った。だが、男はすぐに物陰に隠れ、銃弾は壁や、デスクに置かれたパソコンに当たった。

立ち上がり、非常階段のドアに向かって走った。銃声。横にあった強化ガラスに当たり、破片が飛んでくる。だが、体には当たらなかった

ドアを開けると、關クワンが階段に座って耳を押さえていた。

「来い！」

關クワンの腕を掴んで階段を下りた。途中で痛いと言ったが無視する。俺はまだ死にたくもないからな。

下におりると、静かだった。どうやらまだ奴らは上らしい。正面の自動ドアに急ぎ足で行った。

すると、青い制服を着た警官が三人来た。誰かが通報したのだから。この時ばかりは仏の様に見えた。場違いなチャイムが鳴り響く。振り向くと、エレベーターから男が三人降りてきた。勿論手にはコルトM733を持ちながら。俺は關クワンを連れて走り出す。

銃声。自動ドアのガラスが割れる。警官が腰に付けたホルスターから支給品のグロック19を抜く。割れたドアを抜け、太陽が眩しい外に出た。

振り返る。照準を合わせようとしていた。俺は關クワンを抱き抱え、何も考えずに茂みにダイブした。

また銃声。多分、あの警官達は死んだだろう。そう考えながらホルスターにパラ・オーディナンスを入れながら、關クワンを立てせる。

前から覆面パトカー四台が向かってくる。けたたましいサイレンを鳴らしながら。

振り向くと赤い丸サングラスの男がこっちを見ながら弾倉を取り替えていた。

「行くぞ」

そう言っクワンて關の手首を掴んで走った。また銃声が鳴り出す。構わず走る。一心不乱に。

## 銃とパスポート

タクシーで歌舞伎町に戻り、コマ劇場とミラノの間のマクドナルドで昼食をとっていた。暫く二人とも黙っていた。レジの打つ音。カップルの世間話。携帯電話で話をしてる奴らの声を聞いていた。關が重い口を開く。

「何で……あたし狙われてるの？」

俺はポテトを口に頬張るのを止め、關を見る。

「それはこっちが聞きたいよ」

ラークを取り出す。

「……」

火をつけ、苛立ちを抑える。窓から外を見ると、珍しく香港の間が少ない。いるのは明らかに観光客や留学生しかいなかった。悪い方向に進みだしたのだ。

「でも、あたし……本当に何も知らないわ」

嘘。關は何か知っているはず。それを無理矢理無きものにしようとしている。調べるしかないな。

いつの間にか短くなつた煙草の火を消し、新しいのに火をつける。携帯電話が震えた。ポケットから出し、画面を見る。黄からだ。

「何だ？」

『今何処にいるんだ？』

「……さあな」

溜め息が受話口から漏れてくる。苛立っている様だ。俺まで苛立つてくるが、煙草で抑える。

『劉の命令であんたを探させて』

「どつという事だ？」

『知らないよ。いきなり召集かけて、そう言われたんだ』

劉も動き出したって事か。

「尚更言えないな」

關クワンが外を心配そうに見ている。視線を追うと、三下チンピラ四人を連れた劉ラウの側近、徐虎ツイ・フイ。元SDU 香港の特殊部隊 の隊員で、一年前に除隊している。噂じゃ、隊長を半殺しにしたとか。今じゃ林組ラムの掃除屋だ。

煙草を灰皿に擦りつけ、關クワンの手を取り裏口に向かう。

「悪いが、切るぞ」

「おい……」

黄ワウが何か言おうとしていたが、切った。従業員が困った表情で見ている。構わず裏口のドアを開け、外に出る。

目立たない様に桜通りを歩き。サンクスの前を通ると“GUNS”と書かれた看板が見えてきた。その店の中に入る。ドアの上に取り付けられた鈴が鳴り出す。

店の中はエアガンやプラモデルや軍事グッズが綺麗に並べてある。目の前にはガラスのショーケースに、その横にレジがあった。

「よお、木村」

ショーケースの奥でパイプ椅子に座って煙草を吹かしてる中年の男たなかきょうすけがいた。GUNSの店長、田中京介。この街では数少ない銃が手に入る店だ。

「今日は美人連れで何の用だ？」

「そんな。美人じゃないですよ」

關クワンは顔を赤くして日本語で言った。田中は煙草の火を消す。

「銃を買いに来た」

田中は吹き出した。

「どつという風の吹き回しだ？」

田中は皮肉な言い方で言う。

「頼むよ田中さん」

田中が溜め息をつく。

「分かったよ」

屈んで何かをし始めた。黒い塊を何個かショーケースの上に並べだす。俺はその内の一個を持った。銃身が飛び出し、銃把には剣と

盾が三つずつ掘られている。

「ベレッタM92Fだ」

田中はベレッタに指をさし、淡々と言う。俺は遊底を動かす。遊底止めが上がり、固まる。薬室が剥き出しになっている。

「初めてか？」

「当たり前だ」

ショーケースの上に置く。

「イタリア製でジャムが少ない。弾は9ミリパラベラムだから貫通力は抜群だ」

自慢そうに言った。

「これ以外にも何挺かくれ。それとライフルとショットガンも」  
それを聞いて田中は目を丸くする。

「ふざけるな」

「本気だ。金なら出す」

田中が後ろにいる關クワンを見る。

「……あいつだな？」

「……………」

田中は暫く黙り込んだ。

「こつちに来い」

田中は俺と關クワンを連れて、奥に入っていった。田中は壁で何やら操作する。すぐに壁が横にスライドする。中に入り、啞然あぜんとした。

銃が壁に綺麗に並べられていて、まるで博物館の様だ。

「好きなだけ持ってけ」

黒く大きなバツクを投げた。それを受け取り、銃を選ぶ。

まずベレッタM92F。色は銀色に輝いている。二挺取り、バツクに入れる。次にシンプルな形のブローニングハイパワー。

巨匠ジョン・ブラウニングが設計した銃だ。全ての原点となった銃と言っても過言ではない。特徴はマガジンセフティーという安全装置が付いている事。二挺入れ、次は木製の銃把と被筒が目立つAK47Sを取った。

AKとはアブトマツトカラシニコフの略で、この銃を見たことない人はまずいないだろ。ゲリラが拳こぶつてこの銃を使う。特徴はどんな悪環境でも正常に作動し、手入れもそれほどしなくてもいいという優れ物だ。折り畳み式の銃床なので折り畳み、バックに詰め込む次にH&K MP5 K。一般に、クルツと呼ばれている。この銃は命中精度がよく、要人警護にも使われているらしい。小さいながら一分間で九百発の連射速度がある。バックに詰め込む。

次に小さな箱型の銃を取った。MACM11 いわゆるイングラムだ。この銃の特徴はなんと言っても連射速度だ。なんと一分間に千二百発と言われている。化け物銃をバックしまい、次はメタリックの銃床が折り畳められ、多数の放熱口が目立つ銃が目に入った。

スパス12だ。この銃はイタリアのフランキ社が作った12ゲージショットガンだ。しかも、セミ、フルに変える事ができるショットガンでもある。スパス12をバックに詰め込む。後ろの棚にある弾や弾倉をバックに入れ、閉じる。これだけあれば十分だ。

「もういいのか？」

田中はセーラムを吹かしていた。

「ああ」 バックを肩に掛け、財布を出す。多分、金は残らないだろう。

「いくらだ？」

「いらねえよ」

田中は煙草を灰皿に投げ込む。とても冗談を言ってる様には見えない。

「……悪いな」

クラウン  
關を連れ、出口に向かう。

「死ぬなよ、木村」

振り返ると、田中が悲しい瞳で見ている。俺は微笑みを返して、ドアを開ける。入ってきた時と同じく、上に付いた鈴が鳴り、静寂

な店の中に響き渡る。

赤に光る太陽が沈んでいく。反対の空には無数の星たちが光りを放ち出している。花道通りを歩き、歌舞伎町二丁目の中に入っていた。

町の中を歩いていると安宿のホテルブリットが見えてきた。ホテル全体が古くさく、真っ白だった壁も今では色が褪せ、灰色になっている。所々に出来た鳥の巢の穴が目立つ。

回転扉の取っ手を押し、中に入る。正面に受付があり、左右に通路があり、エレベーターが付いている。

「いらつしゃいませ」

受付員が軽く頭を下げた。

「二名様で？」

「ああ」

受付員は後ろにある鍵の列から一つ取った。その上に数字が書かれていた。

「四 八号室です。あちらのエレベーターをお使い下さい」

受付員は右の通路に手を差し出す。鍵を受け取り、木で出来た通路を歩いてエレベーターに乗り込む。4のボタンを押して、エレベーター動かしした。酷く遅いエレベーターだ。

四階につき、ドアが開いた。薄暗い通路の出迎え。天井に電気がついているが、片方が消えていたり、両方消えているのもある。良いホテルだな。

軋む通路を歩き、四 八と書かれたドアの前に来た。鍵でドアを開け、部屋の中に入る。關はすぐにベッドに倒れ込んだ。すぐに寝息が聞こえてきた。無理もないな。

俺はベッドの隅にバックを置き、もう一つのベッドに腰を下ろす。關は寝返りを打ち、俺の方に安堵な表情を向ける。

寝ているのを確認し、財布を抜き取る。中身は一万円札が四枚、千円札が三枚、小銭が少々。ゲオの会員カード、美容室のスタンプカード、運転免許所。



運転免許証を抜き取り、財布を戻す。内ポケットに入ったパスポートを取り出し、中身を見てみる。見た目は綺麗だ。綺麗過ぎて、逆に怪しい。運転免許証とパスポートを尻のポケットに突っ込む。

俺は關クワンの体に布団をかけ、そのまま部屋を出た。何気ない動作だが、以前の俺だとやらなかった。何かが崩れだしたのだろう。

ホテルを出て二丁目の中を歩いていると、前に第二和幸ビルで左に曲がり、金属音が聞こえてくる。新宿バツテイングセンター。

中に入り、受付にいる婆さんに声をかける。

「調子はどうだ？ 阿婆（婆さん）」

歳の割には皺しわが少なく、鋭い瞳、丸まった顔、白髪は伸びて耳を隠している。この世界じゃ、知らない奴はいないだろう。葉成紅イエ・チヨンホン。

北京からやってきて八年、ずっとこの街の裏情報を使い、儲けている婆さんだ。

「なんだ……祐一ユウイチかい」

感情の籠もっていない北京語で、手元にある夕刊をめくる。俺は尻のポケットから關クワンの運転免許証とパスポートを出し、差し出す。

「これを洗ってほしい」

不慣れな北京語で話す。

「六万だよ」

「馬鹿言つなよ婆さん。四万が良いところだ」

日本語で叫んだ。トイレから出てきた男が見てくる。俺はラークを出し、火をつける。

「……分かったよ」

「相変わらずだね、あんたも」

そう言ってパスポートを開く。虫眼鏡で隅々を見ていく。

「随分と手の凝りようだね」

煙を吐き出し、バツテイングを見ていた。金髪の男が側で見ている女に良い所を見せようとスイングする。全て空振り。

「少しかかるよ」

キーボードに手を置き、タイプする。俺は煙草を吸いながら、終

わるのを待つ。腕時計に目を落とす。八時二十九分。

「名前は關香梅<sup>クワン・ヘンメイ</sup>。性別は女。生年月日は一九九一年三月二十日。広東省出身」

「……つまり、本物って事か？」

パスポートを開いて見せる。葉<sup>イエ</sup>が指をさしている場所を見る。

「……赤い？」

「その通りさ。ここだけ赤い。この筋の奴は自分が作った証拠を残す奴がいるのさ」

煙草を灰皿に擦りつける。

「つまり、別人だよ」

頭の中が混乱してきた。謎がまた一つ増えた。

「ありがとよ。婆さん」

六万を渡す。

「エスパスに行ってみな。そこで右手の甲に焼け傷がある崔成愛<sup>チェ・ソンエ</sup>に見せな。何か分かるかもしれないよ」

崔成愛<sup>チェ・ソンエ</sup>。名前から分かるのは韓国人としか分からない。普段はそいつの身元を調べてから会うが、今はそうも言ってもらえない。

「祐一<sup>ユウイチ</sup>。あんたとんでもない穴に嵌<sup>は</sup>まったね」

「どういう意味だ？」

「林<sup>ラム</sup>が襲われたみたいよ」

「何？」

「まあ、頑張りなよ」

不敵な笑顔で葉<sup>イエ</sup>は手を振る。俺は背を向け、バッテリーセンターを出る。

花道通りを渡り、一丁目へ。桜通りに入り、平和通りに移り、人で埋め尽くされたコマ劇場の前を通り、一番街<sup>ラム</sup>。林組<sup>ラム</sup>の人間が何人かいたが、見つかる事はなかった。

エビ通りに入り、西武新宿駅通りに向かって歩く。交通量が多くなった西武新宿通りは車が絶え間なく走っている。きらきらと輝くネオン看板。エスパス日拓新宿本店だ。

中に入ると、パチンコやスロットの音がうるさかった。奥へと進み、右手の甲に火傷を負った奴を探す。探していると、妙に当てている奴がいた。銀色のメダルがじゃらじゃらと出てくる。レバーを引く。その手には火傷の傷があった。

「崔成愛チェ・ソンエだな？」

そいつは黒い髪を肩まで伸ばし、右耳にはピアス、黄色ジャージに、紺色のジーンズ。

「誰？」

殆ど訛りのない日本語が返ってきた。フが揃い、またメダルが出てくる。

「葉成紅イェ・チョンホイの紹介できた」

「ああ。あの婆さんね」

パスポートを見せる。動きが止まる。どうやら何か知ってる様だ。「ここに写ってる女の事を教えてくれ」

「あのババア」

微かにそう言った。

「店を出ましょ。話はそれから」

崔は会計を済ませに受付に行く。俺は先に店を出ることにした。スロットの音楽がうるさくてかなわない。

煙草をくわえ、火をつける。喧しい音が自動ドアが開く度に聞こえる。サラリーマンやカップルで道が賑わいだした。

「一本くれない？」

いつの間にか崔が横にいた。俺は黙ってラークの箱を差し出す。細く、綺麗な指で煙草のフィルターを摘む。ジッポで火をつけてやる。

「話してくれないか？」

崔は煙を吐き出す。

「それはあたしが作ったのよ」

驚きはしなかった。葉の婆さんに言われた時から何となく想像していた。

「確か三年前ぐらいかな。いきなり三百万渡され、パスポート作れないかと聞かれたわ」

「それで？」

煙を吸い込み、間を空ける。

「中国人にしてくれって言われたわ」

これには流石さすがに驚いた。密入国した中国人が怪しまれない様に偽造パスポートを作るのは当たり前に行われているが、中国人にしてくれなんて言う奴がいるとは思っても寄らない。

「あたしもびつくりしたよ。今までいろんな人種のパスポートを作ってきたけど、こんなケースは初めてだよ」

「その女は何人なんだ？」

「さあね。話した時は片言な日本語だったけど」

ようやくパズルのピースを一個填めた様な気分だ。煙草を指で弾き飛ばす。

「ありがとよ」

「あんた名前は？」

「木村だ」

「覚えておくわ」

タクシーに乗り込み、ホテルへと戻る。これで關クワン 別人だが

に何を聞くかは決まった。後は彼女次第だ。場合によっては殺す事にもなるだろう。

## パズル

ホテルに戻り、部屋のドアを開けると、彼女は頬を膨らませてベッドに座っていた。

「俾番我呀（返して）」

彼女が手を差し出す。

「ああ、返してやる。質問に答えたらな」

ホルスターからパラ・オーディナンスを抜き、安全装置を分かるように解除する。彼女は驚いた表情もせず、俺を見つめる。

「君は關香梅クワン・ヘンムイじゃない。まして、中国人でもない。君は誰だ？」

何時でも撃てる様に右手の人差し指は引き金の上に置く。

「……」

「答える」

考えさせては駄目だ。こういうタイプは助かる為に、いろんな嘘をぶち撒ける。考える暇は絶対に与えない。

「そうよ。あたしは關香梅クワン・ヘンムイじゃないわ」

日本語で返ってきた。

「中国人でもないんだろ？」

「半分は中国人よ」

「残りの半分は？」

「日本人」

俺は左手でラークを出し、茶色のフィルターをくわえる。

「一本いいかしら？」

俺は昼間の彼女とは別人と思いつながら、ラークの箱を渡す。

「中国で育つたのか？」

「ジッポで火をつけてやり、自分の煙草にもつける。」

「ええ。香港で育つたわ」

何故か、彼女の瞳が憎しみと怒りの色に変わった様な気がした。

「香港にいた時はよく虐められたわ。日本人の血が通っているから

つて」

俺は黙って彼女の話に耳を傾ける。

「お母さんも日本人の夫を持つてゐるって影で言われてた。お父さんは一生懸命働いたわ。少しでもあたし達の生活を良くしようって」

彼女の瞳が涙で濡れ始めている。

「でも、あいつはあたし達の幸せを奪っていった」

「あいつ？」

憎しみと怒りの瞳を向けられた。

ラム・ヤンミン  
「林迎明」

彼女の目から綺麗な水が流れる。煙草の煙を吸い込み、落ち着かせようとしている。俺は昔を思い出していた。家族に手を下した事はないと思う。

「お父さんは車で跳ねられ、お母さんは撃たれたわ」

「ちよつと待て。何でお前の両親は殺されたんだ？」

煙が吐き出され、宙を泳ぐ。

「借金したの」

淡々とそう告げる。若干、口角を上げ笑つてる様にも見えた。

「それでその後お前はどうしたんだ？」

「日本にいる祖母に預けられた。そこであたしは誓つた。絶対、仇を打つと」

「それ何年前だ？」

「八年前よ」

「八年前なら呉がボスだ。なんで林を憎む？」

彼女は大きな溜め息をつき、首を横に振る。

「呉は残留孤児二世よ。その前から日本にいたわ。香港でボスだったのは林よ」

そう言われてみれば呉は日本語が上手かった。

「そして、四年前。あたしは香港のマフィアが歌舞伎町に来た事を知り、家を出て歌舞伎町に来た」

四年前。歌舞伎町が闇の町に変わった年だ。この年はよく覚えて

る。

「それで、三年前に崔チエに頼んで偽造パスポートを作らせ、林ラムに近寄ったって事か」

「ええ」

パズルが出来上がった。だが、何か足りない。その何かは分からないが、今は聞かないでおこう。

すっかり短くなった煙草を灰皿でもみ消し、パラ・オーディナスの安全装置を掛ける。彼女は小さく溜め息を漏らした。

「名前は？」

彼女も煙草を消す。

「日本名は松嶋梓まつしまあすは。中国名は趙英蓮チエン・インリンよ」

「阿蓮リンちゃんね」

阿蓮は小悪魔の様な笑顔を見せる。それに見とれているとポケットの携帯電話が震えだした。画面を見ると、再び黄ウオンからだ。

「もしもし？」

「林ラムが襲イわれた」

葉イの言葉を思い出した。

「誰に？」

「北京バクギン」

「……生きてるのか？」

「ああ。無事戻ってきた」

戻ってきたって事は歌舞伎町は更に歩けなくなるな。

「それだけだ」

「ありがとな 唔該」

電話を切る。同時に阿蓮が口を開く。

「あいつ死んだ？」

「あいつとは林ラムの事だろう。」

「いや」

舌打ち。苛立ちながらラークの箱から一本抜き出す。俺は煙草の事はなにも言わず、火をつけてやる。

「林を襲わせたんだな？」

阿蓮は再び煙を吸い込む。

「そうよ。北京の奴は簡単に引き受け貰ったわ」

「それが間違いだ」

阿蓮は気分を損ねたのか、鋭い目で睨んできた。どうやら事の大  
きさが分からない様だ。

「何でよ？ 敵対してる北京の連中に頼んで何が間違いなのよ？」

俺は首を横に振り、ベッドに腰をおろす。

「確かにお前の言う通り北京とは対立しているし、この街は北京の  
奴が沢山いる。でもな、マフィアと連んでるのは極僅かだ。その中  
で一番有名と言ったら葉成紅の婆さんだ」

阿蓮が目を大きく開く。どうやら葉の婆さんを知ってる様だ。

「あの婆さんは頭がいい。林の連中が来たらあっさりとお前の事を  
教えるのさ。あの婆さんはそういう奴なのさ」

阿蓮は立て続けに吹かす。俺は勝利の笑顔を浮かべながら、口を  
開ける。

「どうなんだ？ 阿蓮」

「そうよ。あの婆の所で頼んだのよ」

俺は大きな声で笑った。

「何がおかしいのよ？」

「お前の馬鹿さが面白いのさ」

「なによ！ あんただって追われてる身のくせに」

「俺はお前の様なドジは踏まない」

ラークの箱から煙草を抜き、火をつける。こんなに気分が良いの  
は久しぶりだ。

「凄い自信ね」

思いつき煙を吸い込む。

「長くこの街にいたからさ」

「じゃ、あなたがあたしの立場ならどうするの？」

「簡単さ。とつとこの街から出ていくね」



「あなたが手助けしてくれるのは？」

笑い飛ばした。

「これ以上危ない橋を渡るつもりは……」

俺は見てしまった。向かいのビルに男が狙撃銃を持っているのを。阿蓮を抱き抱え、ベッドの下に転がり込んだ。ベッドの上に敷かれた布団が弾む。パラ・オーディナンスを抜き、窓ガラスに撃ち込む。バツクを引き寄せ、AK47Sを出し、弾倉を差し込み、棹桿を引き、初弾を薬室に送り込む。ドアの鍵が撃ち壊される。銃床を折り畳んだ状態でドアに向かって撃つ。

眩しい発光と排莢口から飛び出す薬莢、喧しい銃声が部屋に飛び散る。パラ・オーディナンスをホルスターに戻し、バツクを背負う。

「ちくしゅう 什街！ ラム 林の野郎！」

穴だらけになったドアを開け、通路を見る。派手なシャツが真っ赤に染まり、ベレッタM92Fを握ったまま倒れた男が転がっていた。

「来い」

だが、阿蓮は動かない。

「何してる？」

「手助けしてくれるの？」

「ここでこいつと別ればこれ以上危険になる事はない。ここできっぱり言うべきだ。」

「……勝手にしろ」

けど俺は阿蓮に恋心を芽生えてしまった様だ。阿蓮が勝利の笑顔を浮かべて俺の後ろに回る。

俺は手で待つ様に指示をし、通路に出る。死体を跨ぎ、直ぐに壁に背を付け、角から顔を覗かせる。薄暗い通路は恐ろしく静かだ。天井に付いた蛍光灯が点滅している。

振り返り、来る様に指示する。小走りで向かってきた。阿蓮の後ろに男が現れた。手にはウージーを握っている。

体で阿蓮を突き飛ばし 殆どタックルだ 銃声が鳴り響く。

すぐに空撃ち。弾切れだ。それでも、男の体に少なくとも五発が撃ち込まれた。

血が汚い壁に飛び散り、壁にぶつかりながら、男は崩れていく。弾倉を替え、再び棹桿を引き、薬室に送り込む。腰のホルスターに手が伸ばされた。気づいた時には阿蓮がパラ・オーディナンスを撃っていた。

銃口の先には受付にいた男が黒星ハクシンを握っていた。男の胸に三つの赤い点がつき、じわじわ広がっていく。阿蓮を見ると、軽い放心状態になっていた。

俺は阿蓮の肩に手を回し、AK47Sをバツクに戻す。遊底が後退したまま止まったパラ・オーディナンスを奪い取る。弾倉を抜き、最後の弾倉を入れ、遊底止めを押し元形に戻す。

階段を使って下におり、無人の受付を過ぎて、ホテルブリットを出た。腕時計は九時になろうとしている。パラ・オーディナンスをホルスターに戻す。

再びバツティングセンターへ向かう。なんとしてもあの婆さんから聞かなくては。

「何処に行くの？」

阿蓮が寄り添いながら聞いてきた。

「婆さんに会いに行くのさ」

「殺すの？」

「まさか」

阿蓮は興味がなくなった様で、ビルの光りに目を移す。俺はライクを出し、煙草に火をつける。煙が夜空に舞う。

二丁目を歩いていたが、無事にバツティングセンターについた。相変わらず金属バツトの音が響く。中に入り、受付に向かう。葉成イェ・チヨ紅はお茶を啜すすっていた。煙草を投げる。

「よお、婆さん。撈成點呀（儲かっているかい）？」

熊わさと広東語で言った。

「何の事だい？」

日本語で返ってきた。

「婆さん。俺たちを売ったな？」

葉成紅イエ・チヨンホイは俺と横にいる阿蓮を見る。阿蓮の手がホルスターに伸びたが、俺は手を握り、阻止する。

「まあ仕方なかったからね」

「で？ 林ラムたちに何を言っただ？」

湯呑みを持ち、息を吹きかける。白い湯気が踊る。

「別に。只……その女が中国人じゃないと林ラムを殺す為に近づいた事ぐらいかな？」

「……婆さん。他にも言ってるだろ？」

「さあね」

葉成紅イエ・チヨンホイがお茶を啜りながら後ろにあるテレビを見る。テレビではアナウンサーがホテルブリットで銃撃戦があった事を伝えていた。

「裕一ユウイチ」

葉成紅イエ・チヨンホイが呟く。

「何だ？」

「あんたも自分の尻に火がついてるんだよ？ そんな女の事より自分の潔白を証明するのが先なんじゃないかい？」

「何か知ってるのか？」

「自分で調べるんだね」

葉成紅イエ・チヨンホイはそう言って蠅はえを追い払う様に手を振る。

「長生きしないぞ。婆さん」

吐き捨てる様に言って、金属バットの音が響くバッティングセンターを後にした。

## 過去と欲望（前書き）

久しぶりの続きです。今回長めに書いてみました。しかも今回は性描写が含ませております。予めご了承ください。

## 過去と欲望

「何で殺さなかったのよ！」

バツテイングセンターから離れ、区役所通りを歩いていると、阿蓮が怒りをぶつけてきた。だが、俺はそれを無視する。

自分の過去を探る。林ラムや劉ラウに恨まれる様な事をしたかを。……思い当たらない。俺は呉ウーと出会うまで普通の街のガイドだった。当時から広東語ができ、香港の奴らの中では評判が良かった。

「ちよつと聞いている？」

頬を膨らませた阿蓮が顔を覗き込んでくる。

「……………」

再び阿蓮を無視。俺は阿蓮と距離をおき、思考を巡らせる。すると、腕を掴まれ、抱きしめられた。唇が重なる。体をすぐに離し、怒鳴ろうとしたその時だった。

「いたか？」

「無い」

ちくしゅう

「仆街！ 第次職安道（次は職安通りだ）！」

アスファルトを蹴る音が次第に遠ざかる。俺はゆっくり唇を剥がす。阿蓮はゆっくり瞼を開け、透き通った瞳を見せる。吸い込まれそうだ。

「…………… 助かった」

ラム

チンピラ

阿蓮の瞳から林の三下が向かった職安通りに目を移した。落ち着かせようとポケットからライターを出し、火をつける。

「別にいいわよ」

素っ気なく答えた。腕を絡ませ、頭を肩に乗せる。俺は何も言わず、煙草を吹かしながら花道通りに向かって歩く。

花道通りに出ると、タクシーを捕まえて行き先を伝える。運転手は軽く頷き、車を走らせた。俺と阿蓮は窓から見える歌舞伎町の光りを見つめながら、終始無言だった。

タクシーは小滝橋通りを走らせ、百人町に入る。途中で降り、後は徒歩で目的地に向かう。阿蓮も黙ってついてくる。大久保駅の近くの“福来”と書かれた店に入った。

この店は堅気の北京人が店長で、ガイドをしている時に知り合い、料理が得意と聞いたのでこの店を紹介した。今では美味しい中華料理店として、知られている。

お腹を燻ぶる様ないい匂いが漂ってくる。店内は如何にも中国の様な飾りが飾られてる。青いチャイナドレスを着た女に軽く解釈し、奥へと進む。

奥に進むと、上にあがる階段をあがり、部屋へと続くドアが並ぶ廊下に出る。一番奥のドアを開け、阿蓮を招く。

部屋の中に入り、横の壁に付いた電気のスวิตチをいれる。真っ暗な闇が晴れ、部屋の全貌が現れた。

正面に小さなテーブル。その右横にベッド。布団が整えられてる。反対に左はいろんな服が掛かったていた。この服は全て下の店長が趣味で集めている。

俺はベッドにバッグを置き、ラークを出す。一本抜き出す。残り五本。火をつけ、汚れたスーツの上着を脱ぐ。ネクタイを少し緩め、ハンガーに掛かった黒いロングコートに腕を通す。

「出かけてくる」

「いつしらっしやい」

阿蓮が手を振って見送る。俺は階段をおり、厨房に入る。鍋に野菜や肉を入れ、炒めてる。

「五番」

料理が出来上がり、コックが小さなカウンターに置き、それをチャイナドレスを着た女が運んでいく。俺は更に奥に進む。

中華鍋を動かし、米が宙に舞う。だが、一粒も零さない。まさに神業。休む間もなく、只管手を動かし、米を炒めていく。

「三番」

中華鍋を持ち、皿に盛られる。俺は煙草を床に落とし、靴で踏み

消す。

「梁」

リヤン・チャオ

梁朝は俺を見つけ、笑顔になる。

「裕一先生」

ゆいいちせん

脂ぎった顔を前垂れで拭う。前髪は相変わらず濡れている。

「上に女がいるんだ。そいつに飯を作ってくれないか？」

「裕一先生の頼みなら仕様が無いですね」

リヤン

梁は早速包丁を持ち、料理の準備を始める。

「それと、その女が出ないように見てくれ」

「分かりました」

俺は厨房を出て、店を抜ける。腕時計に目を落とす。十時四十分。ネオン看板の光りが一層目立つ。小滝橋通りまで歩き、タクシ―を捕まえる。

「大林警護事務所まで」

運転手にそう告げ、走り出す。車は職安通りに入り、窓の外を見ている。目を血走らせた林組の三下が目立つ。パトカーも何台か見回りに回っている。

明治通りに右折。路肩に車が電信柱に突っ込んだ事故現場があった。萎んだエアバック。皺だらけのフロントガラス。小さく細かいガラスがコンクリートに撒かれている。警察官が現場検証を行っている。タクシ―はその横をゆっくり通り過ぎる。

ホテルバリアンリゾートで右に曲がり、石黒商事ビルの隣の大林警護事務所でタクシ―が止まった。代金を払い、降りる。ビルの前に男が三人立っている。三人とも二十代前半だろう。ホストの様な格好している。

「そこを退いてくれ」

眉間に皺を寄せ、目で威嚇してくる。

「あんだ手前」

てめえ

三人が俺を囲う。

「俺はお前らチンピラと遊びに来てる訳じゃねえんだ」

正面にいた男が胸倉を掴む。俺はその手を捻る。透かさず右にいる男を蹴り飛ばす。左にいた男が拳を飛ばす。後ろに下がり、かわ躲し、痛がっている男を投げる。

「手前！」

腹を押さえながら、突っ込んでくる。俺は肩を掴み、顔に膝蹴り。顔を飛び上げる。髪を掴んで、そのまま壁に叩きつける。骨が砕ける音が聞こえる。真っ赤な血が鼻から流れ出す。どうやら鼻が折れた様だ。

俺は起き上がろうとして二人に近づき、前にいる男の顔側面を蹴る。そのままの勢いで左足を回し、顔側面に蹴りを入れる。

俺は倒れた男を跨ぎながら、コートを直す。ラークを出し、火をつける。残り四本。階段で三階まであがり、大林警護事務所と書かれたドアを開ける。

正面に大きなデスクがあり、座り心地の良さそうな椅子に若い男が座っていた。すぐ右にもデスクがあり、女がキーボードを叩く手が止まっている。

「もっと頭の良い奴を雇え」

煙を吸い込み、心臓を落ち着かせる。

「らしいな。病院に連れて行かせろ」

両端にいた男に命令する。一礼し、部屋を出ていった。

「コーヒーはいるか？」

おおばやし かずひな 大林和久。ヤクザの大林組の頭だ。冷酷な男で手段を選ばない。

何度か俺も命を狙われたな。

「ああ」

大林が女にコーヒーを持ってくる様に指示をする。俺はくわえていた煙草を灰皿に擦りつけ、火を消す。

「それで……用件は？」

大林はどつかりと椅子に座り、腕を広げる。まるで役者だ。

「ラム林と劉ラムの家族構成を知りたい」

「面白い事を言うなお前」



「そうかい」

デスクの前に置かれた椅子に座る。

「分からねえな。同じ組の人間なのにどうしてわざわざ俺に頼むんだ？」

「色々あってね」

女がコーヒーカップを差し出す。それを受け取ると、女は一礼し元の席に戻る。

「お前も大変だな。噂じゃ、倉庫の襲撃者で婚約者を奪ったいかれ野郎だぜ」

「只の噂さ」

コーヒーを飲み、眠気を抑える。これじゃ、サラリーマンだ。

「で？ 俺に何か得があるのか？」

「この街をやるよ」

大林がでかい口を開け、笑い出す。俺はコーヒーを啜る。

「街をか？ 気に入ったぜ！」

空になったコーヒーカップをデスクに置く。

「そりゃ良かった」

大林の笑顔が消え、手をデスクに置き、顔を出す。厳つい顔が目と鼻の先だ。鋭い目が俺を見つめる。まるで獲物を狙う鷹たかの様に。

「手前てめえ、俺を殺したいのか？ そんな冗談を信じると思っか？」

「勝手にしてくれ」

大林は椅子に座り直し、顎を摩さする。俺は返事を待つ。

「よし、いいだろう。調べてやる」

「悪いな」

俺は椅子から立ち上がり、大林に背を向ける。ドアを開け、廊下に出る。ドアを閉める際に大林を見た。口角を上げ、手を振っていた。

再びタクシーを捕まえ、行き先を告げる。タクシーの中で俺は仮眠をとることにした。腕を組み、窓に頭を傾け、目を閉じる。

目的地に近づくと目を開け、窓の外を見る。薄暗い路地。遠くに

ネオン看板の光りが見える。

嫌な考えを思いながら、運転席を見る。誰もいない。背中に寒気が走る。俺はドアを開けようと、押すがびくともしない。完全に閉じ込められた。

座席に寝そべり、窓ガラスを蹴る。割れる気配がない。ホルスターに手を伸ばす。空。革製のホルスターにはなにもなかった。

車が止まる音が聞こえた。見ると、昼間の赤い丸サングラスをかけた男が五人の男を連れて立っていた。手には勿論、銃が握られているが、暗くてよく見えない。

発光。すぐ右に穴が出来た。それを合図にタクシーに銃弾が撃ち込まれていく。俺は出来るだけ体を縮め、シートから飛び出す銃弾車の様な厚さなら、大抵の銃は貫通する　　を避ける。

銃撃が止み、その隙に穴だらけになった透明の板をぶち破り、運転席に滑り込む。

「くそ！」

急いで直結させる。コードを二本持ち、合わせた。線香花火の様に火花が散る。横にあるサイドミラーが吹き飛ばす。エンジンがかかる。

ギアをDに入れ、アクセルを目一杯踏み込む。金属がコンクリートを削る音がうるさい。それでもスピードが出るだけ出す。

歩道にいる人だかりにクラクションを鳴らす。人だかりが避けていく。道路に出る。クラクション。右から車が突っ込む。

ガラスが割れ、顔にかかる。痛む腕を庇かばいながらフロントガラスを蹴り飛ばす。ガラスが外れ、ボンネットの上に置かれる。

俺はなるべく早く外に出ようと這いずる。銃声。歩道にいる何人が悲鳴をあげ、あたふたとしている。ボンネットを転がり、コンクリートの地面に着地。

銃声は止まず、ネオン看板が破裂。頭が破裂し、脳味噌を地面に撒き散らす。肺を撃たれ、息を切らしながら手を差し伸べ、助けを求む。地面に伏せたまま動かない。そんな光景が今、目の前にある。

まさに地獄。

地面を蹴って走り出す。窓ガラスが割れる。俺は無我夢中に走る。福来フクライに着き、尾行がないのを確認し、中に入った。中は従業員も客もいない。閉店したから当然だ。静かな店の奥に進み、階段をあがる。

「離してよ!」

「いいから来い!」

喧しい北京語が聞こえた。俺は息を殺して階段をあがり、半開きのドアを覗く。阿蓮が梁リヤンに無理矢理立たされていた。俺はドアを蹴り飛ばす。ドアが勢い良く開き、呻うめき声と共に、戻ってくる。

ドアを開けると、阿蓮が抱きついてくる。梁リヤンは止まらない血に四苦八苦しながら、何かを探している。俺は足下に転がった黒い回転リボ式拳銃ルバを拾う。

銃身にはS&Wと彫られていた。M629ESの三インチ。ラバスミスアンドウエッソン製の銃把。四十四口径の弾丸が六発詰まっている。重い撃鉄を起こし、梁リヤンの頭に向ける。

「梁、これはどういう事だ?」

恐怖に満ちた瞳は泳ぎ、震えている。

「お……俺は何もし……知らない」

容赦なく梁リヤンの膝を撃ち抜く。炸裂音が耳に残る。梁リヤンの泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

「梁、余りふざけた事を言つと一生料理作れないぞ」

「リ……林……林リン・インミン迎明だ」

とつとつ俺まで消すつもりか。まあ、予想はしていたが。俺は梁リヤンの胸倉を掴み、無理矢理歩かせる。

「服を着替える」

阿蓮にそう言つと、梁リヤンを連れ階段をおりる。痛いと呼ぶが無視。厨房の奥にある裏口で梁リヤンを放り投げる。

「さっさと失せろ」

梁リヤンは笑みを浮かべながら立ち上がる。

「裕一。あんた死ぬよ」

銃で顔を殴る。梁は真つ赤な血で染まった歯を何本か吐き出す。俺はドアを開け、梁を押し出す。梁は早口の北京語で何かを言ったが、ドアを乱暴に閉めて断ち切る。

撃鉄をゆつくり戻し、右側にある円筒止めを親指で押し、円筒を左に出す。六発　一発は空だが　の弾丸を出す。空の一発をポケットに入れ、五発を詰め込む。円筒を勢い良く戻し、ズボンとシヤツの間に差し込む。

階段をあがり、部屋に入る。ピンクの下着を着た阿蓮が立っていた。俺がいるのに気づいていない様だ。真つ白い肌、程良く膨らんだ胸、引き締まった腰、可愛い尻、細い足、全てに見取られてしまった。

阿蓮は赤いベアトップ、黒いミニスカート、黒のフリルカーディガンを選ぶ。服を持ちながら振り返る。目が合う。阿蓮は恐怖と怯えの目をしていた。俺と分かるとその目はなかったかの様に消える。「びつくりした」

溜め息混じりの声が聞こえてくる。

「早く着替える」

「はいはい」

阿蓮はさっさと服を着る。バックを背負い、腕時計に目を落とす。十一時十一分。途端に睡魔が襲ってきた。頭を振り、紛らわす。

「行くぞ」

「はい」

見事に着こなした阿蓮が腕に絡みつく。俺は熊とらしく溜め息をつきながら、階段をおりる。

「何処に行くの？」

「安全な所かな」

「ふう〜ん」

店の裏のドアを開ける。梁の姿はなく、真つ黒な闇があるだけ。その闇の中にひっそりとある三菱のランサーエボリユーシヨン5。

後ろに回り、排気ガスを出すマフラーに手を入れる。金属の感触。車の鍵を出す。

鍵を差し込み、開ける。車に乗り込み、エンジンを動かす。阿蓮は助席のシートに座る。ギアをDの位置に動かし、アクセルを踏み込む。

小滝橋通りを靖国通りへと向かう。新宿大ガードの交差点を左に曲がる。明るいネオンと殺気のようなオーラに包まれた歌舞伎町を見ながら、靖国通りを進んでいく。歌舞伎町にいられそうにないな。

靖国通りをずっと走らせていると、曙橋が見えてきた。大きな橋を潜り、右にハンドルをきって外苑東通りに入る。

「歌舞伎町には何年いるの？」

阿蓮が頬杖をつき、窓から流れる様に映る町並みを見ながらそう言った。

「七年いる」

素っ気無い返事をした。

「長いのね」

「長すぎる」

七年もあそこにいれば嫌でも生きる道を探さなくてはいけなかった。そうでなければ飢えた薬中ヤクちゅうかナイフが腹に突き立てられた死体になるかの二つだ。

俺は家が貧しかった為に高校を卒業してすぐに歌舞伎町に仕事を探しに来た。すぐに居酒屋で働く事が出来、仕事に精を出していた。そんなある日、店長がいらないと思ったら翌日東京湾に浮かんだ。

警察の話に寄ればヤクザから多額の借金していて、その日も借金取りが家に押し込んで金を要求したそうだった。だがその日も払わなかった店長は即座に頭を撃ち抜かれた。

詳しい事は知らないが、俺は次の仕事を探しに街をぶらついているとガイドという仕事を見つけた。すぐに書類を書いて面接を受けると即座に採用された。

その後は必死になって仕事をこなして金を稼いだ。ここまでは思

ったより楽にこれた。呉ウに会うまでは。

「家族はいるの？」

「みんな死んだよ」

車は相変わらず外苑東通りを直進している。まもなく新宿通りとぶつかる。

信号が黄色から赤へと変わった。ブレーキを踏み、徐々（じょじょ）に速度を落とす。

「じゃ〜お互い一人同士ね」

阿蓮が小さく呟く。俺は阿蓮の顔を見た。孤独と不安が入り交じった表情をしながら、相変わらず町並みを眺めていた。ポケットからラークの箱を取り出す。

「吸うか？」

阿蓮に差し出すと細い指で茶色のフィルターを摘む。ジッポに火をつけ、煙草の先端を燃やす。

信号が青になり、車を動かす。交差点を直進して、四谷署の前を通過した。煙草の煙が流れてくる。

「……何であたしにこんな風に接してくれるの？」

阿蓮が疑問を投げてきた。考えるが答えは見つからない。はつきり言っても自分でも何をしているのか分からないのだ。俺は一体何をしてるんだ？

「分からない」

車を暫く走らせ、青山通りも通過して六本木に入っていた。繁華街の中を走らせていると“W”という文字のネオンが飾られたホテルの駐車場に入った。駐車場には数台の車が停車しており、適当な位置に車を止めた。

「ここが安全な場所なの？」

エンジンを切った。駐車場に沈黙が訪れる。

「少なくともあそこにいるよりはましだ」

阿蓮は煙草を灰皿に入れて車から降りた。俺も銃が入ったバックを持って車を降りた。車に鍵を掛け、冷たいコンクリートを踏みな

がらエレベーターに乗り込む。

エレベーターで一階に着くと広いロビーが現れた。右に豪華な椅子とテーブルがあり、そこで一人の男が椅子に腰を下ろしていた。左は各階に行くエレベーターが二機と階段がある。正面には受付があり、二人の受付員がてきぱきと仕事をしている。

俺は受付を済ませにカウンターに近づいていく。

「部屋を一つ」

「いつも言ってるだろ？ 来る時は連絡しろって」

茶色が混ざった黒髪の男が顔を上げずに言った。男の名前は池上昌也<sup>みまさや</sup>。歌舞伎町でガイドをしていた時に薬<sup>ヤク</sup>でくたばりかけていた所を助けたのが切っ掛けだった。

当時池上は仕事を渡り歩きながら賭け麻雀にはまっていた。稼いだ金は殆ど麻雀に使う。その内金が無くなりヤクザから借金をしてまで麻雀をやった池上は、借金取りに追われる毎日。そしてそのストレスの影響で薬<sup>ヤク</sup>に手を出してしまった。

あとはよくある話さ。日に日に量が増え、最終的には過剰摂取で死にかけている所を俺が見つけた訳だ。

池上がカウンターに鍵を置く。それを素早く受け取る。

「いつもの所に入れとくよ」

池上にそう言うと、エレベーターのボタンを押す。

池上はその後、ホテルの仕事に専念し俺は助けた礼に部屋を使わせてくれと頼んだ。池上がそこで条件を出してきた。部屋を使わせる代わりに薬<sup>ヤク</sup>をくれと。俺はその条件を飲み、部屋を使う度に薬<sup>ヤク</sup>を仕入れて池上に渡す事になっていた。

エレベーターのドアが開き、乗り込むと5のボタンを押した。ドアが閉まり静かに上昇した。すぐに五階に着き、ドアが開く。明るい廊下に出ると、床は赤いカーペットが敷かれていた。蛍光灯も生き生きしている。

奥へと進み、部屋に向かう。

少し歩いた所にその部屋はあった。他と変わらないドアの鍵を開

けて中に入る。部屋の中は至って普通だ。俺の場合、眠る事が出来ればそれで十分だからだ。

阿蓮はベッドに腰を下ろし、部屋を見渡す。俺はバッグをベッドの横に置き、ネクタイを取る。流石に体力の限界だ。

だが休む訳にはいかない。やる事が沢山残っている。まず、過去を知りに行かなくては。そろそろ大林から連絡が来るだろう。それとあの殺し屋の事も調べる必要があるな。そして脱出路。

目眩めまいが襲めってきた。

「大丈夫？」

阿蓮の声が聞こえてきた。

「大した事じゃない」

阿蓮が俺の横に猫の様に縋すがりついてきた。

「何の真似だ？」

「癒してあげようか？」

俺の話を見無視して唇を重ねてきた。舌が絡んでくる。柔らかい手が股間に触れ、すぐに固くなる。

唇が離れていく。阿蓮の顔は小悪魔の様な笑顔をしながらベルトが外され、ズボンがおろされた。パンツから固くなった陰茎いんけいが出された。

俺は何もせず見ていた。いや、正確には動けなかった。

陰茎が阿蓮の口によって消えていった。何とも言えない感覚が体中に走る。頭の中が真っ白になっていく。もう流れるままに身を任せると。

阿蓮が顔を上げる。俺は阿蓮をベッドに倒し、服を脱がす。小さな乳房を掴む。甘い喘ぎ声。我慢出来なくなった俺は、ピンク色のパンティーをずらしそこから覗く膣ちゅうに陰茎を突き刺す。

阿蓮は目を閉じ、苦痛な表情をしたが、すぐに快楽に浸る。腰を動かす。阿蓮は突かれる度に喘ぎ声を漏らし、抱きついてきた。更に激しく腰を突く。そのまま膣の中で果てた。

阿蓮がうっとりしながら甘い息を吐く。それが耳元に届き、性欲



が湧き出てくる。

## 決意

その後、阿蓮とたつぷり三回交わった。俺と阿蓮はベッドで横になつていた。流石に三回もやれば、ばててしまう。

「裕一」

腕に抱きついていて阿蓮が呟く様に呼んだ。

「何だ？」

阿蓮を見ると何か決心をしたのかいつもの明るい表情とは打って変わり、真剣そのものだった。

「あたしたちどうなるのかな？」

「さあな。生きるか死ぬかなんて誰も分かりはしない」

阿蓮が抱きついてきた。俺は阿蓮の髪をいじる。

「あたし……裕一と一緒にいたい」

髪をいじるのを止めた。

「一緒に逃げよ」

俺はラークの箱から最後の一本に火をつけた。煙を天井に吐きながら、考える。阿蓮の言葉が何回も頭の中で木霊こだまする。

「裕一はあたしの事嫌い？」

「……まさか。今までに会った女の中で一番さ」

阿蓮は笑顔になり、ゆっくり唇を重ねてきた。俺もそれに答える。唇を剥がし、煙草のフィルターを阿蓮の小さな口にくわえさせた。

ベッドから抜け出し、ズボンを履く。ベルトで固定してから回転式拳銃のM629ESを腰に差し込み、シャツを着る。コートを拾う。

「ねえ」

振り返り、阿蓮の目を見た。そこには闇もなく、偽りもなく、純粹な目をしていた。

「考えといて」

コートに腕を通し、再び唇を重ねた。すぐに剥がして部屋を出た。

エレベーターで駐車場に下り、ランサーに乗り込んだ。携帯電話が震えた。画面を見るとお馴染みの非通知が映り出されている。

「もしもし？」

『調べてきたぜ』

大林だった。

「それで？」

『お前……前に中国人を殺さなかった？』

中国人という単語に過剰に反応してしまった。頭の中で後頭部が吹き飛んだ女が手招きしていた。

呉<sup>ウ</sup>に突然呼び出しを食らった俺はすぐに駆けつけた。するとそこには呉<sup>ウ</sup>以外に三人の男と全裸の中国人女がいた。女の膺<sup>おびただ</sup>から夥しい白濁の精液が流れ出ている。

三人の男が女をトヨタのクラウンのトランクに放り込むと躊躇<sup>ためら</sup>いなく閉じこめた。呉<sup>ウ</sup>が俺の耳元でこう囁いた。

「あの女を処理してこい」

それだけ言うと黒のメルセデスベンツに乗って去って行った。俺は半強制的に車に乗せられ、静かに車を走らせた。

俺は黙って車の向かう先を見ていた。俺にはそれしか出来なかった。煙草を吸う事も、話す事も。次第にフロントガラスに雨が打ちつけてくる。

車は人気のない路地に止まった。そこで車を降り、雨が降る外に出る。トランクから女が出され、ふらふらと立っていた。一人の男が近づいてきた。

スーツの中に手を入れ、ゆっくりと出す。回転式拳銃が握りながら。それを差し出され、丁寧に受け取る。ラバー製の銃把を握り、短い銃身を持ち上げる。銃身にはパイソンと掘られていた。

「さっさと殺<sup>や</sup>れよ」

後ろにいる男が楽しそうに言った。俺を試しているのだ。俺は撃

鉄を起こし、銃口を女の頭に合わせる。引き金を引く。喧しい銃声。やかま銃弾は女の頭には当たらず、コンクリートの壁に抉り込んだ。

女がふらふらと歩き出した。

「早くしろ」

後ろにいた三人の内、一人が黒星を抜き出していた。再び撃鉄を起こし、震える手で狙いを定める。片手では無理なので両手で持つ。狙いが定まる。引き金を引く。再び喧しい銃声と共に強い衝撃が腕に伝わる。

銃弾は女の後頭部に吸い込まれた。頭が破裂。人形に様に崩れ、ゴミの山に倒れ込む。もうぴくりとも動かなかった。その代わりに穴の開いた頭から真っ赤な脳味噌が雪崩の様に流れ出てきていた。パイソンの銃口から白い煙が吐き出されていた。俺はゆっくりと銃口を下ろし、女の死体を見る。真っ赤な血が雨によって流されていく。

耐えきれず吐瀉物としゃぶつを撒き散らした。男たちが笑う。三回程吐くと気分が落ち着いてきた。

「乗れよ、木村」ムクチユン

今すぐにも男を殺したかったが、その後の事が目に見えている。俺は黙ってパイソンを握りながら車に乗り込んだ。手からパイソンを剥ぎ取られ、車が動き出す。俺は窓から女の死体を眺めていた。

『聞いてるのか?』

頭を振り、頭の中をすつきりさせた。

「ああ」

『それで、どうなんだ?』

「一人。女だ」

それを言った途端に大林が笑い出す。俺は底なし沼の中に入った様だ。

『多分その女だ。いいか? その女はな、劉の母親なのさ』

もう浮き上がったてはこれない位置まで来ている様だ。

「これはお前に対する復讐なのさ。中国人てのは根に持つタイプだからな」

だが本当に復讐だけなのだろうか。復讐だけなら俺を殺して終わりなはずだ。まだ何かある様な気がする。

「ありがとな」

電話を切った。ハンドルを握り、アクセルを踏み込む。静かな駐車場から外苑東通りに出た。外苑東通りを歌舞伎町方面に向かう。死神を乗せて。

歌舞伎町に着いた時には日にちが変わっていた。車を花道通りにある新宿ハイジア駐車場に止めた。そこから歌舞伎町を眺める。嫌な気配が蠢蠢いてた。とても街には行けそうにない。

携帯電話を取り出した。頭に叩き込んでいる番号を押す。コールが鳴る。……一回……二回、コールが途切れる。

「何だ？」

萩原の声が聞こえてきた。

「情報が欲しい」

「じゃいつもの場所で」

電話が切れた。俺はポケットに手をつ突っ込む。舌打ち。煙草が切れた。

“一緒に逃げよ”

突然、阿蓮の言葉が頭の中で蘇る。取り合えず歩いた。自分でも驚く程、動揺しているのだ。頭を掻き、落ち着かせ様と同じ場所を何度も行き来する。

車のエンジン音が駐車場に響き渡る。俺は車と車の間に身を潜める。目の前をレガシイが通り過ぎていく。舌打ち。今のは覆面パトカーだ。そして乗っているのは……。

レガシイが止まり、中から萩原と歌舞伎署の工藤が降りてきた。最悪だ。

「木村。早く出てこい」

工藤の声が静かな駐車場に響く。俺は渋々（しぶしぶ）車の影から出る。だが俺も馬鹿じゃない。大勢の刑事が出てきた時の為に手を後ろに回し、いつでもM629ESを抜ける様にした。

「俺一人だ」

「あんたの言う事なんて信じられるかよ」

工藤が笑う。その隣で申し訳なさそうに萩原が立っていた。俺は銃把を握りながら工藤と萩原に近づく。人の気配はない。

「何の様だ？」

「何の様かだと？ 自分の組に追われ、指名手配されてる奴が暢気のんきな事言つてられるな」

指名手配か。いつかはなるとは思っていたがな。

「煙草ないか？」

工藤がスーツのポケットから赤いマルボロの箱が出てきた。それを差し出され、一本抜き取る。

「木村、さつさと街から出ていけ。街を血で濡らすつもりか？」

ジッポで火をつけ、ゆっくり煙を吸い込む。頭がゆっくり回り出す。煙を吐く。

「……………」

工藤はスーツの中に手を入れ、一枚の写真が出された。その写真を受け取り、目を落とす。そこには赤い丸サングラスをかけ、コルトM733を構えていた。忘れもしない、あの男だ。

「こいつは劉が雇った殺し屋だ。名前はゴーストと言っらしい」

写真を返す。奴とはその内会いそうだ。

「元アメリカ陸軍で射撃の腕が良いらしい。そんな奴までも敵にまわしてまで残る理由があるのか？」

「……………個人的な問題だ」

ゆっくり煙を吸い込み、吐き出す。なんだが自分では自分ではない様に感じてきた。一体俺は何がしたいんだ。誰か教えてくれ。

「……………そうか」

工藤の目が変わり、冷たく冷酷な目になった。俺は工藤の目から

離せなかった。

「次に会う時は覚悟しとけよ」

そう言つてレガシイに乗り込む。エンジンがかかり、レガシイが駐車場を出ていく。俺は見送りながら短くなつた煙草を捨てた。

「正一郎。調べて欲しい事がある」

萩原は黙つて聞く。

「林を調べてくれ。いつ日本（じっぽん）に来たのか、昔の事もだ」

「ああ。分かつたよ」

萩原の肩をぽんと叩き、ランサーのある場所に向かう。車の列から白のランサーをみつけ、乗り込む。次はあいつの所だ。ランサーのエンジンを可動させ、駐車場を後にした。

花道通りを走り、風林会館の所で左に曲がり区役所通りに出た。

区役所通りは大分交通量が減つたが、歌舞伎町の光のせいで賑やかさは変わらない。

区役所通りを進んでいくと職安通りに出て、大久保に入った。大久保の中を車で走らせていたらコンビニと居酒屋の間に階段があった。車を止め、エンジンを切つた。車を降りて人に見られない内に階段を駆け上がる。

木製の扉を開けた。店の中はジャズが流れ、落ち着いている。だが誰もいなかった。一人を除いて。

カウンターに煙草を吸っている女が座っていた。女は紺色のジーンズにフードの付いた黒いパーカーを着て、中に白いＴシャツを着ていた。

化粧はまったくしていない。それでも整つた顔だちで、美人だ。髪はショートで真ん中で分けている。身なりを変えれば（たちま）忽ち男どもが寄ってくるだろうに。

カウンターの奥ではグラスを磨いている口髭を生やした男がいた。男の体格はがっちりしており、黒いズボンに白いシャツに黒い蝶ネクタイをしている。顔は穏やかだが、何処か暗いイメージがある男だ。

「珍しい客だな」

男が呟く様に言った。

「来ちゃ悪いのかよ」

女の隣に座った。灰皿には既に六本の吸い殻が入っていた。

「来ると思つたわ」

女の名前は菅原雅美。すがわらまさみ元殺し屋だ。今は逃がし屋という仕事をしている。主に国外逃亡の手配をしている。

ここに来るとは自分でも思ってもいなかった。

「手配出来るか？」

菅原はゆつくりとグラスに入った酒を飲み干す。

「ニューヨーク行きなら」

駄々をこねてる暇ではない。

“一緒に逃げよ”

再び阿蓮の言葉が頭の中で蘇った。俺は阿蓮と一緒にならんと考えているが、もう一人の俺が拒む。理由は分かっていた。それは終わりのない逃避行をするという事なのだ。

「それでいい」

「それじゃ今夜、芝浦ふ頭の一番奥に来て」

頷いて席を立った。

「じゃ、夜に」

そうに言つて店を出た。階段を下り、さっさとランサーに乗り込んだ。エンジンをかけ、再び職安通りに入る。速度を多少上げて、歌舞伎町を離れた。いつ見つかるか分からないからな。

ランサーを走らせ、阿蓮のいるホテルへと向かう。真つ暗な空が少し明るくなっていた。



## 平和な一時（前書き）

また性描写が含まれております。予めご了承ください。

## 平和な一時

ホテルに着いたのは一時十一分だった。部屋に入ると阿蓮はベッドにくるまつていた。コートを脱ぎ、椅子にかける。靴を脱いで阿蓮の横に行く。

「お帰り」

阿蓮が抱きついてきた。俺は阿蓮の額にキスをする。阿蓮が微笑み、両目を閉じる。今度は唇にした。

息を吐きながら、仰向けになる。

「疲れた？」

「かなりな」

阿蓮は俺の頭を優しく撫なでた。睡魔が一気に襲ってくる。だがここで寝たら阿蓮が裏切る様に感じた。

「大丈夫。あたしは祐一の事裏切ったりしないよ」

俺の心を読んだのか、阿蓮がそう言った。俺はゆっくりと瞼を閉じる。すぐに暗い闇へと飲み込まれた。

暗い闇に俺は一人。他には何もない。草も。木も。見慣れたビルも。車も。あるのは、果てしなく続く闇だけだった。

俺は歩き出す。特に意味はない。闇が幾いくひさ久しく続くだけだ。突然真っ白な玉が遠くにあるのが見えた。俺は取り合えずそこに向かう。だが同時に足下が沈みだした。足が無くなっていく錯覚を感じた。急いで足を動かして、沈むのを防ぐ。徐々にではあるが玉には近づいていった。

そして玉にようやく近づく事ができた。玉は近づくにつれて大きくなり、やがて玉ではなくドアなのが分かった。ドアノブに手を置く。だけど回らない。足が沈んでいく。もう腰まできている。

必死にもがくが、時すでに遅し。黒いのは胸の位置にまで達して

いた。その時、光の扉が開き、人影が映った。

助けを求めるが、影は何もしてくれない。遂に顔の半分が沈んだ。影が動き、顔がはつきりと分かった。そこにいたのは……自分だった。

もう一人の俺は哀れむ様な目で俺を見下ろしていた。そして、踵を返して光に包み込まれていく。やがてドアが閉まり、真っ暗になった。その時、既に俺は闇に飲み込まれ這い上がる事はできなかった。

目を開けた。白い天井が目飛び込んでくる。額に乗った汗を拭き、視線を横に移す。阿蓮が静かな寝息を立てながら眠っている。俺はベッドから抜き出し、隅に置かれた冷蔵庫を開けた。

中には缶ビールとスポーツ飲料のペットボトルが入っていた。ペットボトルを取り、プラスチックのキャップを開けて一口飲む。乾いていた喉が潤う。キャップを閉め、冷蔵庫に戻す。

腕時計に視線を落とす。午後一時二十九分。約十二時間寝た事になる。窓の外を見ると、真っ赤な太陽は真上に昇っていた。

「あ、お早う」

振り返ると阿蓮が目を擦りながら体を起こしていた。柔らかそうな乳房が丸見えだ。何故か無性に性欲が湧いてくる。俺は阿蓮に近づき唇を重ねた。舌を絡ませ、乳房を揉む。

そのまま再びベッドに倒れ、唇を離す。

「祐一のここ、もう固いね」

阿蓮が嬉しそうに言った。俺は膣の中に指を入れる。阿蓮の表情が快楽に浸っていく。

「お前のここはすっかり濡れてるな」

阿蓮は頬を薄ら赤くしながらも嬉しそうにしていた。指を激しく動かす度にぐちぐちと音が立つ。阿蓮の喘ぎ声が部屋に響く。俺は指を抜き、M629ESを床に置いてズボンをおろす。

パンツから陰茎を出し、膣に突き刺す。そのまま激しく腰を動かし奥へ奥へと突き刺した。

「祐……………好き」

阿蓮の細い腕が首に巻き付いてきた。

「あたし……………絶対……………裏切らないよ」

阿蓮の甘い声が耳元に届く。

「だから……………」

「一緒に逃げよう」

俺は突きながら言った。

「今夜、この街から出る」

膣の中に精液をぶち撒けた。阿蓮を強く抱きしめる。阿蓮が震えているのが分かった。

「……………遠い所が良いな」

阿蓮は耳元でそう囁いた。陰茎を膣から抜き出す。阿蓮が力を失った陰茎にしゃぶりつく。

「綺麗にしてあげる」

微笑みながら舌を巧みに動かし、張り付いた精液を舐め取っていく。程なくして、阿蓮が微笑みながら顔を上げる。俺は阿蓮の頭を撫でシャワーを浴びに、浴室に入った。

服を脱ぎ、温かい湯を体に浴びた。体の毒素が全部流れていく気分だ。

軽く浴びて、白いタオルで体に付いた水滴を拭った。服を着て浴室を出た。

「シャワーでも浴びてこい」

「はい」

阿蓮が素っ裸のまま浴室に入っていた。すぐに水が弾く音が聞こえてくる。俺はそれを聞きながらM629ESを拾い、銃が入ったバックに押し込む。

浴室のドアが開き、髪をタオルで拭きながら出てきた。バックをベッドの隅に置き、ベッドに腰を下ろす。阿蓮が横に来る。

「お腹空いた」

「食べに行くか？」

そう聞くと阿蓮は黙って頷く。

「じゃ出かける用意をしろ」

阿蓮は微笑みながらてきぱきと服を着ていく。俺は靴を履き、バックから銀色に輝くベレッタM92Fを出して腰に差し込む。コートを着て存在を消す。

コートを着終わると同時に阿蓮が腕に絡んできた。近くで改めて見るとフリルのカーデイガンが妙に、似合っていた。

「早く行こ」

阿蓮に急かされ、部屋を出た。廊下を歩き、エレベーターに乗って地下駐車場に向かう。

相変わらず静かな駐車場。白のランサーに乗り込み、エンジンをかける。駐車場にエンジン音が響く。助席に乗った阿蓮はわくわくしながら座っていた。ギアをDの位置に合わせ、アクセルを踏む。

外苑東通りを進んでいく。阿蓮は忙しく、首を動かしていた。暫くして、阿蓮が指をさしてあそこが良いと言った。俺は反論もせず、そのレストランの駐車場に入った。

車を降りて、レストランに入る。阿蓮は目を輝かせながら店内を見渡す。店内は明るく、ボックス席がいくつもあり、もう既に何人がが座っていた。右の奥に行くと公衆電話とトイレがある。左横には厨房があるようだ。女の店員が出たり入ったりしていた。

「お客様は二名様で宜しいでしょうか？」

いつの間にか黒縁眼鏡をかけた若い男が横に来ていた。

「はい」

阿蓮が返事をする。

「では、こちらへどうぞ」

男が手で招きながら進んでいく。

「どうぞ」

俺と阿蓮は席に着いた。俺はコートを脱ごうとしたが、止めた。

「お決まりになりましたら、そちらのボタンを押して下さい」

男はそう言うで一礼し、去っていく。阿蓮がメニューを開き、時折困った表情をしながら決めていた。俺はメニューをざっと目を通し、決めた。阿蓮はまだの様だ。

「そんなに悩む必要があるのか？」

「ある」

溜め息をついた。携帯電話が震えだす。ポケットから出し、携帯電話を開く。非通知。俺は黙って席を立ち、公衆電話の前で、電話に出た。

「もしもし？」

『調べた』

萩原の声だった。だが、どこか様子がおかしい。

『会って話したいんだ。今から』

伊藤の時を思い出した。

「今は無理だ。そうだな……」

腕時計に目を落とす。現在、三時八分。

「五時にいつもの場所だ」

『……分かった』

電話が切られた。俺は不審に思いながら、携帯電話をポケットに押し込んだ。席に戻ると、テーブルには水が入ったグラスが置かれていた。阿蓮を見ると、まだ悩んでいた。ボタンを押す。

「ちよつと」

「遅すぎだ」

そう言うつと阿蓮は頬を膨らませた。先程の男が来たので、注文を頼む。阿蓮も黙って注文を頼んだ。男は再び一礼して去っていった。「ねえ、船で何処に行くの？」

頬杖をしながら聞いてきた。

「ニューヨークだそうだ」

「ニューヨーク？ 本当に？」

「ああ」

「……二人でニューヨークかあ。なんだか楽しみだな」

阿蓮の頭の中にはニューヨークの街が映っている筈だ。俺はそれを見ながらにやけてしまった。グラスを手に取り、冷えた水を胃に流し込む。

暫く阿蓮とニューヨークの話をしていると料理が運ばれてきた。

阿蓮が頼んだのは肉汁が溢れたステーキだった。俺はというと只のスパゲティー。

フォークを使って麺を絡ませていく。阿蓮はさっそくナイフとフォークで肉を切り始めていた。ミートソースが乗った麺が口の中に運ぶ。

窓の外を見ると、太陽が雲に隠れ始めていた。歩道では携帯電話と話している者、耳にイヤホンを填めている者、談笑している者、手を繋いでいる者。平和な風景だ。

時折阿蓮と談笑しながら食事を楽しんだ。食事を終え、車でホテルに戻る。そこで阿蓮に用事があると言って再び歌舞伎町に向かった。

歌舞伎町に着いたのは四時五十一分だった。賑やかな靖国通りを西武新宿駅通りに入り、新宿ハイジア駐車場に着いた。車を止め、エンジンを切った。静かになる。

ドアを開けて車を降りた。右手を後ろに回し、M629ESの銃把を握る。ゆっくり辺りを見渡しながら駐車場を歩く。所定の場所に着き、腕時計に目を落とす。四時五十五分。

「木村」

M629ESを抜き、声がした方に銃口を向けた。その先には怯えた表情をした萩原が立っていた。

不意に目眩が襲ってきた。体の力が無くなり、コンクリートに倒れる。いや目眩じゃない。殴られたのだ。それに気づいた時には既に真っ暗な闇の中にいた。

## 最後の…

どのくらい眠っていたのだろう。声が聞こえてきたが、何を言っているかは分からなかった。

突然冷たい何かを被った。目をゆっくり開けた。水が辺りに散らばっている。目の前に誰かが立っている。吉田だった。その周りには数人の男がいた。

「よく眠ったか？」

吉田は笑っていた。俺は逃げようと体を動かすが、無駄だった。すぐ後ろには体格の良い巨漢の男が仁王立ちしていた。それに、手は何かで縛れている。諦めて、吉田に向き直る。

「歓迎ありがとよ」

周りは灰色の壁で、天井には電気玉が一個あった。そして、巨漢もいれて四、五人が俺を囲んでいる。

吉田が寄ってきた。

「もう一度聞こう。ブツは何処だ？」

「知らん」

横にいた男が腹に拳を叩き込まれた。息が漏れ、膝をつく。吉田は首を左右に振っていた。

「お前が答えれば街は静かになるんだ。血は沢山だ」

苦しかったが何とか言葉にできた。

「一つ聞く。……俺が何をした？ あんた達に何をした？」

俺は吉田を睨みながら更に続ける。

「いいか？ 劉リュウに何を言われたか知らんが、いずれ殺されるぞ。良いように使われて……」

拳が飛んできた。あつと言う間に鼻を潰された。どうやら吉田は本当に空手の達人らしい。

俺は鼻を押さえようとしたが、腕が動かせないの思い出し、目を固く閉じて我慢した。どうやら折られてはいないようだ。だが、大



量の鼻血が流れてきた。

吉田は胸ぐらを掴んで引き寄せた。

「何をしたかだと？ 組員殺しといて暢気な事を言ってるじゃねえ！」

そういえば、店で撃ち殺したのを思い出した。

「……それが理由なのか……本当に」

「さあな」

大体は検討はついている。どうせ、街を乗っ取る気だ。馬鹿な奴め。

「それはどうでもいい。ブツは何処だ」

首を振った。吉田が目で合図する。横にいた男二人が、奥に消えた。程なくして、男二人が何かを引きずりながら戻ってくる。

目の前にそれが置かれた。萩原だった。顔は痣あざだらけで、両目は開けられそうにない。

「言え」

吉田を見ると、手には俺が持っていたベレッタが握られていた。

その銃口は、萩原を狙っている。

「本当に知らない！ いいか？ 俺の話を……」

言い終わる前に喧しい銃声が木霊した。萩原の顔の真ん中に銃弾が撃ち込まれ、肉片と真っ赤な血が飛び出す。

「……あ、悪いな。思わず撃ちまっした」

吉田が笑い、周りの奴も一緒になって笑い出す。

「豚野郎」

吉田は一步さがり、首筋に見事な蹴りを入れられた。それを何とか耐えたが、次の一撃が来た。左足を軸にして体を捻り、右足が頬に当たった。吹き飛び、壁にぶつかる。

「いつまでタフを気取ってるつもりだ？」

吉田に髪を掴まれ、顔を上げさせられた。頬に軽く張り手をする。俺は壁を蹴って吉田の顔に頭突きをお見舞いした。不意をつかれた吉田は鼻血を出しながら吹き飛ぶ。

「手前！」  
てめえ

すぐ横にいた男に脇腹を蹴られた。そのまま袋叩き。俺は転がりながら逃れようとするが、すぐに拳が飛んでくる。

「おい！ 立て！」

無理矢理立たされる。体のあたこちが痛む。目の前が霞かすんでよく見えないが、誰かが立っていた。痛みが走る。

顎を殴られ体が宙に、浮き真後ろな吹き飛んだ。

「そのくそつたれを立たせろ！ ぶっ殺してやる！」

吉田が叫ぶ。奥のドアから男が入ってきた。手には電話の子機を持っていた。

「お電話です」

吉田に差し出した。吉田は苛立ちながら取り、耳に当てる。

「誰だ？ …… あんたか。何の用だ？ …… 俺に任せろ。奴はもう知ってるぞ。 …… 分かったよ。計画通りにな」

電話を男に返す。俺の勘だと相手は劉ラウの様だな。殺せって電話だろつ。

吉田は木製のバットを持った男に耳打ちをした。男が頷く。吉田は黙って部屋を出ていった。

「立たせろ」

端にいた男に無理矢理起こされた。

「何すんだ？」

男はバットをスイングした。バットは肋あはしに直撃。尋常じゃない痛みが体に走る。中で鈍く折れる音がした。叫んだ。

「くそ野郎！」

横にいた男にミドルキックを入られた。どす黒い血を吐く。バットを持った男の服に血が飛び散った。

「手前！」

男はまたスイングした。今度は顔面だった。意識が吹っ飛んだ。また真つ暗な闇の世界にのめり込んでいく。

夢を見ていた。いつもの夢だ。真っ暗な闇の中に女が立っている。女が目の前で真っ赤な血をぶち撒けながら倒れていく。ゆっくりとすべてがスローモーションだった。

俺は正面で震えながらコルトパイソンを握りながら呆然と立ち尽くしている。突然足を引つ張られる。見ると撃ち殺した筈の女が眉間に大きな穴を開けて、夥しい血を出しなし、虚ろな目で足を掴んでいる。恐怖の余り銃を撃つ。何回も。だが、当たらない。それもその筈。死人なのだから。

弾が無くなり、銃を放り投げた。また足を引つ張られる。体制を崩し、倒れる。足を大きく振る。それでも女は足を握り続けていた。泣きながら足を振る続ける。急に暖かい温もりを感じた。後ろから誰かが抱きしめている気分だ。顔を覗き込む。

いつもはここで夢から覚める。だが、今日は覚めない。

急に顔を上げる。驚く事に、満面の笑顔の阿蓮が抱きしめていた。俺は泣きながら笑う。

俺はこの夢をずっと見続けた。何年も。長い暗闇から光が射し込んでくるような感じだった。

叫びながら阿蓮を抱きしめる。この時俺は心に誓った。世界中の誰よりもお前を愛している。突然光が包み込んでいく。

目をゆっくり開けた。灰色の床が映った。引きずられている様だ。ドアが開けられ、放り投げられた。宙を舞い、ゴミ袋の山にダイブする。生臭い匂いが鼻をつく。

男達がにやにやした顔でゆっくり近づいてきた。

「くそ野郎が。運が良かったな」

腹を蹴られた。よく見るとバットを持っていた男だった。最早、痛みも感じない。

「二度と面見<sup>ツラ</sup>せるな！」

また蹴られた。男達が戻っていく。再び真っ暗になった。

ゆっくり起きあがった。辺りを見渡すと、遠くで歌舞伎町の光が見える。どうやらまだ生きてる様だ。

街に向かつて歩き始めた。脇腹が痛かったが、ここにいてもしょうがない。俺にはやる事がある。守らないといけない人がいる。

通りに出るとそこは花道通りだった。腕時計を見た。六時十七分。携帯電話が震え出す。見ると、菅原からメールが来ていた。“九時”と文字が並んでいるだけ。

脇腹の痛みを堪えながら、駐車場へ急ぐ。一心不乱に走った。途中で、痛みで壁に手をつきながら走った。

ようやく駐車場に着き、ランサーに乗り込んだ。エンジンを掛け、アクセルを踏み込む。駐車場にタイヤが空回りする音が響き渡る。

車を追い抜く度にクラクションが聞こえた。気にせず速度を上げていく。何度もぶつかりそうになりながらも、ホテルに着いた時には六時五十七分だった。

車のエンジンをかけたまま、エレベーターに乗り込んだ。中には中年の夫婦が乗っていた。どちらも真っ青になりながら俺を見ていた。かなり酷い怪我の様だ。

エレベーターを降り、部屋に向かう。部屋のドアを開けると、阿蓮は青白い顔で駆け寄ってきた。思わず笑いそうになった。

「大丈夫？」

阿蓮は必死に辺りを見渡し、何処かへ行ってしまった。

「なんとかな」

独り言を言いながらベッドに座り、バックをベッドの上に置いた。阿蓮が救急箱を持ってきた。

「手当しないと」

「大した事はない」

「いいから」

そう言っって血を綺麗に拭き取っていった。次に右目の辺りを消毒して、そこにガーゼを貼った。次に頭の傷口にガーゼを貼り、包帯

を巻いていく。

「ありがとう」

今の時間は俺にとって心も癒された時間だった。同時に自分の救世主と感じた。

「気にしないで」

救急箱を閉まっていた。

「急いで身支度しろ」

バックからスパス12と12ゲージのショットシエルの箱を取り出した。

「ここはもう危険だ」

ショットシエルを七発詰め込んだ。

「分かった」

阿蓮が振り返り、真剣な眼差しで答えた。

バックからもう一挺のステンレスのベレッタM92Fを取り出し、弾倉を差し込む。三個の弾倉をコートの左ポケットに突っ込んだ。

ベレッタをズボンとシャツの間に差し込む。M629ESも取り出し、それも差し込む。阿蓮が戻ってきた。バックを背負いスパスの被筒をスライドした。

「行くぞ」

阿蓮に待つ様に指示して部屋を出た。薄暗い廊下は不気味な程静まっていた。まるで嵐の前の静けさの様に。阿蓮に合図して部屋から出てきた。阿蓮が背中回る。

階段の方に向かって歩いた。刹那、十メートルぐらい離れた先にあるエレベーターのドアがゆっくり開いたのが見えた。中からあいつが出てきた。あの赤い丸サングラスに頬の傷のある男。ゴーストが、四人連れて出てきた。

時間が止まった様な気分だった。ゴーストがバックから銃を取り出す。出てきたのはシグSG551だ。

この銃はスイスのシグ社が作った突撃銃の一つだ。カービンモデルで、室内戦でも扱いやすくなっている。要するに今みたいな時だ。

この銃の特徴は銃口の近くに過熱すると色が変わるリングが取り付けられてる事だ。

阿蓮を連れて角に隠れた。銃撃が始まった。コンクリートの壁の破片が無数に飛び散る。

「こつちだ」

スパスを構えたまま移動した。

「後ろ！」

阿蓮が後ろから叫ぶ。見ると黒いベレッタを持った男が腕を上げていた。

「伏せる！」

振り返りながら阿蓮がしゃがむのが見えた。そのまま撃つ。炸裂音と共に男が吹き飛ぶ。続け様にトカレフを持った男が二人が走ってくる。何発か撃ってくるが、走っているせいで銃弾は見当違いの方向に飛んでいく。

被筒を動かし、排莢口から赤いシヨットシェルが勢いよく飛び出す。

撃つ。

ポンプする。

再び撃つ。

二人男の体に八粒程度の小さい弾を浴びせた。素早くポンプした。「来い」

阿蓮を連れて走り出す。正面の窓ガラスに反射して後ろが見えた。後ろからAK47を持った男が現れた。

阿蓮を押しして角に隠れた。窓ガラスに銃弾が撃ち込まれ、穴が開き、窓に皺ができた。体だけ通路に出し、スパスを放った。男が吹き飛ぶ。

続いて赤い丸サングラスが登場した。銃撃。薄暗いので発光がやけに眩しかった。壁にナトー弾が何十発も決り込んだ。再び阿蓮を連れて走り出す。走りながらポンプして次の弾を送り込んだ。

前にトカレフを持った男が現れた。走りながらスパスを撃つ。男

が吹き飛び壁にぶつかった。

今度はイングラムを持った男が前に現れた。今度は隠れた。壁に雨が降り注いだ。壁が穴だらけになる。壁に隠れながら撃った。男は細長い弾倉を握りながら後ろに飛んでいく。

後ろを見た。ベレッタM92Fを握った男が撃ってきた。だが、撃った銃弾は壁に被弾。透かさず撃った。男は天井に一発撃って倒れていく。蛍光灯に当たり火花を散らしながら派手に割れた。

スパスは弾切れになったのでシャツとズボンの間に入れたベレッタを抜き出した。長い通路の奥に緑色に点灯した非常口が見えた。薄暗いのはつきり見える。

「怖いか？」

阿蓮が首を横に振った。俺は微笑んだ。阿蓮も微笑んだ。阿蓮の手を握って走った。映画のワンシーンの様に。

それも束の間だった。奥から三人がトカレフを持って飛び出してきた。銃撃。壁に銃弾がめり込んだ。走りながらベレッタをがむしやりに撃つ。男達が慌てて隠れた。

角からウージーを構えながら男が現れた。阿蓮を壁に寄せながらベレッタを撃った。男の腹に当たる。だが、またウージーを構え、撃ってきた。銃弾は窓ガラスや壁に当たった。俺は容赦なく何十発も撃った。男が倒れながらもウージー撃ち続ける。通路の三分の二の蛍光灯を派手に破裂させながら。

真っ暗になった通路を阿蓮の手を握りながら走った。

非常口の鍵をベレッタで壊し、外に出た。雨が降っていた。頭の中に文字が浮かんだ。“終わり”と言う文字が浮かんで消える。

阿蓮が不安な顔をしていた。“大丈夫だ”と言おうとしたが言葉に出来なかった。どうやら俺は怖じ気付いた様だ。

「行く」

阿蓮が手を引く。だが下からベレッタを持った男が現れた。差し込んでいたM629ESを抜き、ベレッタと交互に撃った。男が撃たれながら非常階段の柵を越えて地面に落ちていく。

振り返った。非常口から男が現れた。ベレッタを向けて撃った。同時に遊底が固まる。眉間に当たり頭を仰け反って倒れていく。続いて、ゴーストがシグを撃ってきた。眩しい発光だった。M6 29ESを撃ちながら階段下りる。すぐに弾切れになったので、その場で捨てた。

弾倉止めを押し、新しい弾倉を差し込みながら急いで階段を下りた。前を見ると先回りをした連中が待っていた。手に持っているのは86Sだ。

この銃は中国北方工業公司、通称ノリンコが作った銃で、キヤリングハンドルとフアアグリップが取り付けられている。だが、性能はそれほど良くない。

銃撃が始まり、眩しい発光が暗い路地を明るくした。

すぐ左に路地があったのでそこに突っ込む様に入っていた。走りながら振り返ってベレッタを向ける。雨で視界が悪かったが、黒い影が現れたので何回も引き金を引く。何発かは壁に当たったが、影が倒れたのが見えた。

発光が見えた。耳元に風を切るソニックウェーブが聞こえた。すぐ横にある壁が爆発する。破片が飛んできたが、気にせず走った。

駐車場に入り、急いでランサー乗り込んだ。フロントガラスに穴が出来た。

「キヤ！」

阿蓮が身を屈めた。エンジンを掛け、アクセルを踏み込む。目の前を見ると池上がグロック19を撃っていた。更に速度を上げ、池上に突っ込む。

衝撃が伝わり、フロントガラスの上を池上が転がっていく。

「ざまあみる！ くそつたれ！」

外苑東通りに出ると車の行列が出来ていた。その車の間にコーストがシグを構えて撃ってきた。

阿蓮の頭をダッシュボードの下に押し込んだ。銃弾がフロントガラスを貫き、シートに当たり中の綿が飛び出す。



右手をウィンドウの外に出し、ベレッタを撃った。当たろうが当たらなかるうがとにかく撃ち続けた。車を追い越しながら外苑東通りを直進し、六本木通りを突っ切った。

穴だらけになったフロントガラスに雨が降り注ぐ。ポケットに入った携帯電話が震えた。画面には菅原の番号が表示されている。

「何だ？」

『今何処にいるのよ。これ以上雨が酷くなったら中止よ』

「分かってるよ。今……」

左のウィンドウに穴が出来た。銃撃だ。今度は後ろのガラスに穴が六つ出来た。阿蓮が悲鳴をあげながら頭を伏せる。

「くそ！」

アクセルを今まで以上に踏み込んだ。白い棒が百二十の上を過ぎていく。

『ちよつと。追われてるの？』

「ああ！」

前の車を追い越した。サイドミラーを見た。二台のBMWが追っかけている。

「必ず行く。じゃあな」

『ちよつ……』

菅原が何か話そうとしたが切った。両手でハンドルを握りしめる。右のサイドミラーが吹き飛ばす。

左手でベレッタを握った。ベレッタを後ろの割れたガラスに向け、撃った。車内が光に包まれる。

後ろを走っていた車のフロントガラスが真っ赤に染まった。急に曲がり、そのままガードレールに突き刺さる様に突っ込んだ。

また銃撃が始まった。ガラスが穴だらけになっていく。

「バックから銃を出してくれ！」

關はバッククラウの手を入れ、箱型の化け物銃を取り出した。MACM 11だ。

「これでいい？」

怯えた顔をして、差し出した。俺はそれを受け取ると阿蓮に微笑んだ。

「上出来だ」

半分無くなつたバックミラーを覗き込んだ。車は丁度斜め右を走つてるのが見える。

「合図したらここ押しながら引くんだ」

サイドブレーキのレバーを触りながら言った。阿蓮は頷きながらサイドブレーキを握った。

俺はバックミラーと睨むようにみていた。突然車がスピードを上げ始めた時だった。阿蓮に合図を送った。

アスファルトを擦る音が、雨の降りしきる世界を凍てつかせた。スピードが一気に落ち、あつと言う間に車と並んだ。その瞬間、右手に持ったイングラムを窓の外に出し、車めがけて、一分間に千六百発の化け物が火を吹いた。

眩しい発光。飛び散る葉莢。血の海と化す車。全てが一瞬の内の出来事だった。

気づかなかつたが、あのゴーストは後部座席で顔の四力所に穴を開けて、死んでいた。

車のスピードを上げ、その場を去った。海岸通りを走り、ゆりかもめが走る下を潜り、静まり返った港に着いた。

バックにイングラムを入れ、右手で持ちながらぼろぼろになったランサーから降りる。雨は大分小降りになっていた。どうやら無事、街を出る事ができそうだった。

「こつちだ」

阿蓮の肩に腕を回し、体を密着させた。阿蓮は腰に腕を回してそれに答える。その状態で芝浦ふ頭が一番奥へと進む。

突然ライトに照らされた。眩しくて前が見えない。ライトの中から一つの影が現れた。劉偉だ。ラウ・ワイ「久しぶりだな、木村」ムクチユン

黒い傘を差しながら近づいてきた。とっさにベレッタを向けた。

銃声。だが撃つたのは俺ではない。劉の手下の徐虎だった。

肩を撃たれ、ベレッタを地面に落とす。左手で傷口を押さえる。痛みが波打っていた。

ライトから影が、一つ、二つ、三つ、と徐々に増えていった。その中には黄來と林迎明の姿も。

「残念だよ、木村」

林がぶつりと呟く。

「お前は日本人だが、家族の一員として見ていた。なのにお前は俺を裏切り、俺の家族を殺した。これは断じて許す訳にはいかない」  
阿蓮がバツクに手を伸ばす。

「女。下手な真似はよせ」

徐が阿蓮にコルト・ガバメントを向けながら言った。

「お前もだ關。いや、趙英蓮だったかな」

林が哀れむ様な目で見てきた。林が合図を送る。横にいた男の銃口が上げた。

「停手呀！」

叫んだが銃口が光り、静かな港に銃声が響く。阿蓮が地面に倒れていった。ゆっくり、スローモーションの様に。夢に出てくる女のように。

俺は阿蓮を腕で倒れるのを防いだ。硝煙がふわふわと宙を舞っている。胸の部分から真っ赤な血が流れてきた。手で傷口を強く押さえる。

「祐……寒いよ。……温かくして」

阿蓮が遠く見るかのような目で俺を見ながらそう言った。黙って阿蓮を抱きしめる。その時、阿蓮が耳元で囁く。

「……………」

阿蓮の体から力が失っていく。俺はそれでも阿蓮を抱きしめた。

「走（帰るぞ）」

林がそう告げた。だが、水を弾く音が聞こえてこなかった。見ると、何人かの男が黒星を抜き、林に向けている。

「劉。これはどういふ事だ？」

劉ラウが不気味な笑みを浮かべる。

「見ての通りさ」

徐ツイが林ラムを羽交い締めにした。林ラムは逃げようともがくがびくともしない。流石は元SDUだ。

「あんたとお前は……俺の母さんを殺した」

大林の言葉が蘇ウオンる。黄ウオンが俺に黒星を向けた。

「知らん！俺はお前の母親なんざ知らん！」

林ラムが吠えたが、横にいた男みぞおちが鳩尾に拳を叩き込む。林ラムは前屈みになり、痛みに耐える。俺はそれを黙って見ていた。

「知らない訳ないだろ？お前はどんなんだ？まさかお前も知らないとほざくのか？」

劉ラウが怒りに満ちた表情で振り返った。今にも発狂し、殺す様な才ラウが体が煙の様にあがっている。

「いや……認める」

あれが本当に劉ラウの母親なのかは知らないが、今の所はそういう事ラウにしておいた方が良さそうだ。

「豚野郎め。日本人の癖にふざけた事しやがって」

劉ラウは俺から林ラムに視線を移した。俺は阿蓮の目を優しく閉じさせた。本当に眠っている様だ。もしかしたら本当に眠っているのかもしれない。そんな錯覚に陥った。

「二人共ここに並べ！」

黄ウオンに黒星をつつかれ、立ち上がる。阿蓮、俺もすぐに行くよ。

目の前には真つ暗な海。そのぎりぎりの所に立たされた。右横に完全に怯えた林ラムが立たされる。

「俺を殺したらどうなるか分かってるのか？王ウオンや陳チャンが黙ってないぞ」

「それぐらい分かってるさ。手は打ってる」

遊底が引く金属音が聞こえた。俺は覚悟を決めて目を閉じる。林ラムが叫ぶ。銃声。叫び声が途切れた。俺はゆっくりと目を開ける。生きてる。

「お前は生かしてやる。だが二度と俺の前に現れるな」

「一つ聞きたい」

そう言いながら振り返ると劉ラウは既にベンツに乗り込もうとしていた。

「何故俺を巻き込んだ」

劉ラウが笑う。まるで俺が冗談を言ったかの様だ。

「決まってるだろ？ トップに立つにはお前が邪魔だったからさ。

何故だが分かるか？」

俺は首を横に振った。

「お前が次のトップに推薦されたからさ。日本人のお前がだ」

劉ラウが続けて口を開く。

「だからさ。それにお前が母さんを殺したのも入るがな」

劉ラウがベンツに乗り込んだ

「これからどうするんだ？ まさか王ウオンや陳チャンと喧嘩する気じゃないよな？」

「あいつらならとつくに死んでるさ」

そう言っつてベンツのドアが閉められた。そのままベンツが雨の中をゆっくりと海岸通りの方角に進んでいく。

「おい」

振り返ると徐ツイと何人かが林ラムと阿蓮を運ぼうとしていた。

「手伝え」

徐ツイがそう言っつと、体が勝手に動き阿蓮を運んでいた。

## 阿蓮との約束

林<sup>ラム</sup>の手は切り落とされ、バケツの中に放り投げられていた。徐<sup>ツイ</sup>が林<sup>ラム</sup>の顔をハンマーで潰す。鼻が潰れ、眼球が今にも取れそうになる。その眼球を鋏<sup>はさみ</sup>で切り取り、袋に詰め込む。

後ろで見張りしていた若い男が雨で濡れたコンクリートに吐瀉物を撒き散らす。隣にいた黄<sup>ウオン</sup>の肩を叩く。

「煙草ないか？」

黄<sup>ウオン</sup>は黙ってセブンスターの箱を差し出してきた。そこから一本抜き取り、ジッポで火をつける。肺に煙を送り込む。落ち着きが戻ってきた。

徐<sup>ツイ</sup>はてきばきと動き、阿蓮に取り掛かろうとしていた。大きな肉切り包丁で綺麗な手を切断する。血が吹き出す。それを見て徐<sup>ツイ</sup>がにやけていた。いかれてる。

俺は煙草を吹かしながらそれを見守った。阿蓮の顔が潰されていく。この世で一番愛した阿蓮の顔が潰れていく。

頭の中で阿蓮との短い一時が映画の様に映り出す。家に迎えに行った事、セックスをした事、食事をした事、短い間だったが、お互いを愛し合うには十分な時間だった。

阿蓮の顔が完全に潰された。もう綺麗な顔をした阿蓮ではなかった。只の肉の塊。煙を吸い込み、ゆっくりと吐く。白い煙が雨の中を漂う。

「おい」

血塗れなつた徐<sup>ツイ</sup>に呼ばれた。

「蹴り落とせ」

俺は黙って従う。林<sup>ラム</sup>の体に足を置き、押す。水飛沫<sup>みずしぶき</sup>が飛んでくる。阿蓮の体に足を置く。阿蓮の最後の言葉が蘇った。

“みんな殺して”

「殺してやる。必ずな」

聞こえない様に小さく言った。膝を伸ばし、阿蓮を押し、真つ暗な海へと姿を消した。水飛沫が飛び散る。

「引き上げるぞ」

徐<sup>ツイ</sup>がそう言つて去つていく。雨の降りが弱まる。見ると、真つ黒な雲の間から真ん丸と太った満月が姿を現す。俺は短くなった煙草を海に捨て、芝浦ふ頭を去つた。

## 阿蓮との約束（後書き）

「愛のために：」改訂版完結しました。最後まで読んで下さった皆様、本当にありがとうございますm（―）m

この作品を読んで意味不明な部分があったり、話が飛んだりして混乱した人がいるかと思えます。自分でも変かなと思いつながら書いたので。もっとこうした方が良さなどありましたら、随時感想などでお知らせ下さい。

最後に読んで下さった いないかもしれないけど 読者様、  
本当にありがとうございますm（―）m



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8045c/>

---

欲望の街

2010年10月8日15時50分発行